

鳴上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11



1987

高槻市教育委員会

は し が き

今年は、嶋上郡衙跡の発掘調査を本市直営事業として実施して以来、11年目にあたります。この間、郡衙北辺・西辺地域において百数十次の調査をおこない、嶋上郡衙の変遷をかんがえるうえで貴重な資料を蓄積してまいりました。

今年度は、とくに史跡指定地の南西方において大規模な調査を実施し、これまで知られていなかったこの地域の様相の一端を、明らかにすることができました。なかでも芥川廃寺と山陽道にはさまれた地区では、嶋上郡衙に直接かかわるとみられる建物群を発見しました。これらの建物群は、郡衙中枢部に匹敵する最大級の建物や倉庫群であり、嶋上郡衙の構成をかんがえるうえで新たな問題を提起しました。加えて、同地区が郡衙成立前から一貫して集落の縁辺部であったことを確認したことも、大きな成果といえましょう。

また現状変更に伴う郡衙中心部の調査は、郡庁院推定の貴重なのがかりとなるものであります。北辺部では、古墳時代から奈良時代の遺構・遺物が多数発見され、阿久刀神社周辺での調査とも関連して嶋上郡衙の生成発展をたどるうえで重要な資料を加えました。

一方、津之江南遺跡では弥生時代前期の遺構を今回はじめて確認し、安満遺跡では遺跡の広がりをかんがえるうえで重要な所見を得るなど、周辺遺跡の調査においても新たな成果を得ております。

ここに今年度の発掘調査の結果をまとめ、概要を報告させていただくとともに、多くの方々のご教示をあおぎ、調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝する次第であります。

昭和62年3月31日

高槻市教育委員会

社会教育課長 杉 本 秀一

例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が国庫補助事業(総額9,000,000円)として計画し、調査を実施した高槻市所在の史跡・嶋上郡衙跡周辺部および郡衙関連遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、高槻市教育委員会・市立埋蔵文化財調査センター所長富成哲也の指導のもと、技術史員大船孝弘・橋木久和・森田克行・鐘ヶ江一朗・文化財専門員宮崎康雄らが担当し、大阪府教育委員会の助力を得て、昭和62年3月31日に事業を終了した。
3. 本書の作成にあたって、出土遺物の写真撮影は大船孝弘が、同実測・製図については宮崎康雄がおこない、遺物整理について恵谷英俊・武村雅一・白銀良子・後藤勇子・北原治の各氏の援助をうけた。厚く感謝する。
4. 調査の実施にあたり、阪上弘・堤誠二・吉岡喜一郎・堤友次郎・堤隆・林甚太郎・辻本政治・久保田芳邦・廣瀬武志・好田聰の各氏および西野水利組合・関西産業株式会社・宗教法人真澄寺・株式会社大江建設などの援助をうけた。また多くの方々から種々ご教示いただき、本市文化財保護審議会委員原口正三氏には調査全般についてご指導いただいた。ここに深く感謝する。

目 次

I 島上郡衙跡	1
II 焼山古墳群	30
III 郡家今城遺跡	33
IV 富田遺跡	33
V 津之江南遺跡	34
VI 安満遺跡	39
ま と め	45

昭和61年度 島上郡衙跡他関連遺跡調査一覧

No	地 区(遺跡名)	調査地	面積(m ²)	申 請 者
1	17-F・G・J地区	清福寺町807-1	999.76	阪上 弘
2	37-A・E・I・M地区	清福寺町982-1他2筆(水路)	89.10	西野水利組合
3	5-M・N地区	郡家本町318	200.00	堤 誠三
4	54-B・F・J・N地区	郡家新町352	1,953.00	吉岡 喜一郎
5	54-C・G地区	郡家新町354	564.45	堤 隆
6	54-C・D・G・H地区	郡家新町355	902.00	堤 友次郎
7	45-I・J・M・N地区	郡家新町254	1,695.00	林 基太郎
8	16-B・F地区	清福寺町895-1	422.30	辻 本 政治
9	23-D・H, 33-D・H地区	郡家新町277-2他5筆(道路)	345.00	高 梶 市 長
10	14-K・L, 15-E・F・J地区	郡家新町303-1他3筆(水路)	119.46	高 梶 市 長
11	45-J・K・N・O地区	郡家新町253	931.54	久保田 芳 邦
12	55-A・B・E・F地区	郡家新町250	856.00	関 西 庄 葵(株)
13	焼山古墳群	阿武野一丁目944-243他22筆	157,144.73	(宗)真澄寺
14	郡家今城遺跡	水室町一丁目781-12	127.17	広瀬 武志
15	富田遺跡	富田町四丁目2517他1筆	518.63	好 田 聰
16	津之江南遺跡	津之江北町216-1他3筆(水路)	289.00	高 梶 市 長
17	安満遺跡 北9地区	高堀町299-1他8筆	2,994.48	(株)大江建設
18	安満遺跡 10地区	高堀町260	1,223.00	(株)大江建設
19	安満遺跡 22地区	八丁堀町326-17他2筆(下水)	215.00	高 梶 市 長

鳴上郡衙跡発掘調査概要

I. 鳴上郡衙跡

1. 17-F・G・J地区の調査

高槻市清福寺町 807-1番地にあたり、小字名は清福之内である。個人住宅建設に先立ち、昨年度末から発掘調査を実施していた。昨年度の概要10には遺構写真と遺物を中心に報告した。今回は、遺構の調査結果を中心に概要を報告する。

遺構（図版第2・3・64・挿図3）

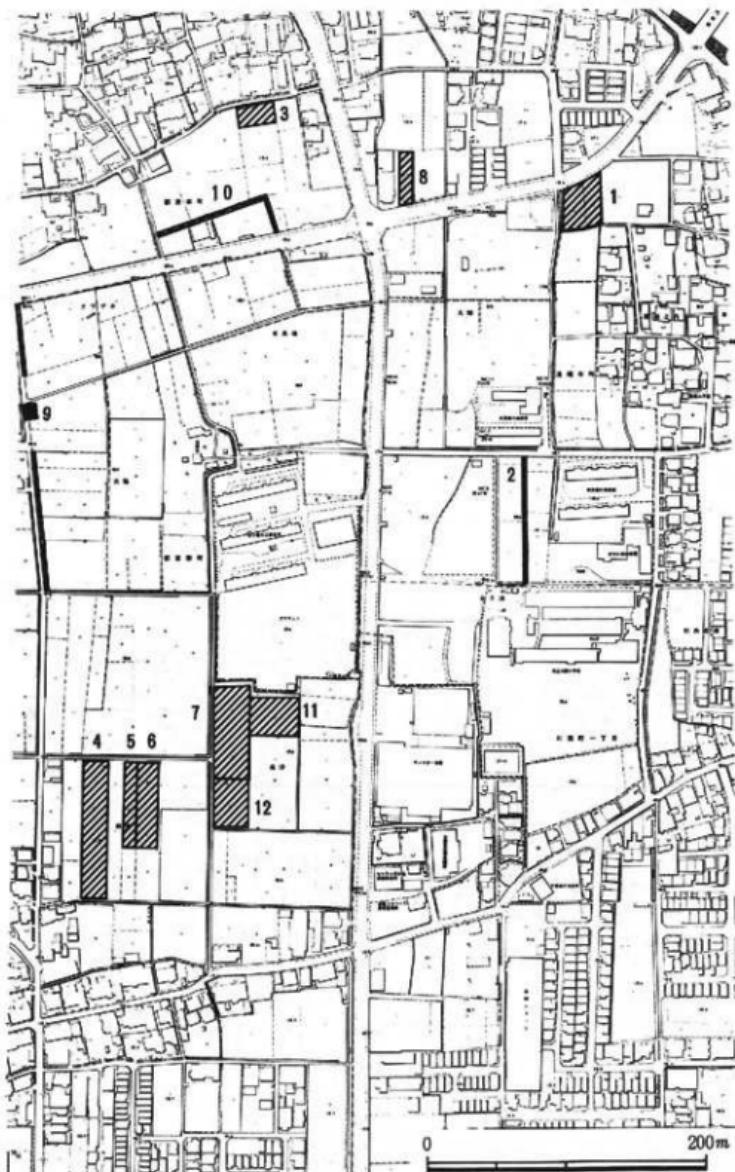
昨年度の概要に報告すみの部分もあるが、簡単にまとめておく。

調査区の基本的な層序は耕土(0.1~0.2m)、床土(0.1m)、黄灰色土(0.2~0.3m)、灰褐色土(0.14~0.2m)、暗褐色土(0.3~0.4m)で地山は黄褐色土である。調査区東南部の地山には拳大の礫が混じり遺構は検出されなかった。

遺構は、竪穴式住居跡8棟、掘立柱建物2棟、井戸1基、土壙9基の他、まとまりを欠く柱穴多数を検出した。



挿図1 史跡・鳴上郡衙跡附寺跡 空中写真



挿図2 鳩上郡衙跡の調査位置図

竪穴式住居は、住居跡 1 を除きすべて方形である。出土遺物からみて、住居跡 1 以外は古墳時代前期とみられる。

住居跡 1 は直径約 8 m の円形で、時期は確定できない。

住居跡 2 は一辺 5.8 m の方形である。重複関係から住居跡 1・3 より新しい時期である。

住居跡 3 は一辺 5.2 m の方形で、床面の凹凸を貼り床によって修正している。

住居跡 3 は周壁下の溝の一部しか確認されなかったが、この住居跡の柱穴とみられるピットの位置からみて、一辺約 5 m の方形とみられる。

住居跡 5 は一辺 6.4 m の方形である。重複関係から住居跡 6・7 より古い時期である。

住居跡 6 は一辺 3.8 m の方形で、埋土から銅鏡が 1 点出土している。

住居跡 7 は一辺 6 m の方形で、周壁の東辺・南辺から約 1 m 内側に幅 0.2 m・深さ 0.1 m 程度の溝が掘られている。先の概要では、この溝が当初の周壁に相当し、時期を経て東・南へ拡張したものと考えたが、住居跡の中央部に位置する一辺 0.9 m・深さ 0.2 m の炉や柱穴の位置からみて建て替えは行なわれていないものと考える。炉の内部から瓶型土器の破片と鉄鑄が出土している。

住居跡 8 は一辺 3.4 m の方形で、溝の一部が検出されただけである。

竪穴式住居跡はかなり重複しているが、方向性からみて、①住居跡 3・4・8、②住居跡 6・7、③住居跡 2・5 のグループに分けられる。住居跡 3 と住居跡 8、住居跡 6 と住居跡 7 のように大形と小形の住居跡がセット関係をなしており、同時存在とみられる。

掘立柱建物は 2 棟検出された。

建物 1 は梁間 3 間(柱間 1.5 m)×桁行 4 間(柱間 1.4 m)で、方向は N-11°-W である。奈良時代とみられる。

建物 2 は梁間 2 間(柱間東側が 1 m、西側が 1.4 m)×桁行 2 間(柱間 1.8 m)で、方向は N-6°-E である。鎌倉時代である。

建物 1 と重複するようにして、ほぼ南北方向に、一辺 0.7~0.8 m、深さ約 0.2 m の柱穴が検出された。柱間が不揃いで、方向しか検出されなかつたため柵列とみられる。奈良時代であるがどのような建物に伴うかは不明である。

土壙は 9 基検出された。この他にも不整形の浅い落ち込みがあるが省略した。

土壙 1 は長さ約 4 m、幅 1~1.8 m、深さ 0.5 m で埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

土壙 2 は長さ 3 m、幅 1 m、深さ 0.35 m である。

土壙 3 は長さ 1.4 m、幅 0.8 m、深さ 0.25 m である。

土壙 4 は長さ 2.4 m、幅 0.9 m、深さ 0.3 m である。

土壙 5 は長さ 1.8 m、幅 0.8 m、深さ 0.3 m である。

土壙 6 は長さ 1.7 m、幅 1 m、深さ 0.2 m である。

土壙 7 は長さ 2.2 m、幅 0.7 m、深さ 0.1 m である。

土壙 8 は長さ 2.6 m、幅 1.2 m、深さ 0.3 m である。

土壤9は長さ3.6m、幅1.8m、深さ0.5mで埋土から瓦器碗が出土している。

土壤1・8は弥生時代後期であるが、不整形で性格は不明である。

土壤2～6はほぼ東西方向に長軸を描えており、土壤7も含めて墓の可能性がある。いずれも内部から土器がほとんど出土していないため、時期は確定できない。

土壤9は建物2と後述の井戸1と共に存し、中世の屋敷地を構成するものとみられる。

井戸(挿図3)は1基検出された。小形の円形石組み井戸である。掘方上面で直径1.2m、底部で直径0.55m、深さ1.1mを測る。底部に曲物を2段すえている。下段の曲物はややゆがんでいるが直径0.5m、高さ0.3mである。上段はやや大きめの直径であるが、南側の右組み付近しか残存していなかった。高さは約0.2mである。

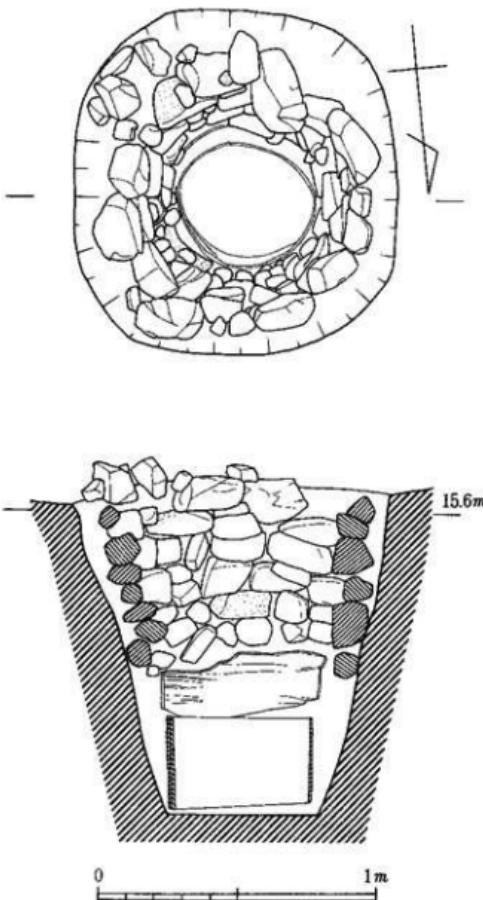
石組みは、曲物の上端付近から河原石を積みあげ、右組み上面の内径は0.8mである。埋土から瓦器碗の破片が若干出土している。時期は縄文時代である。

遺物(図版第17・挿図4)

主な遺物類は報告済みであるため、その後の遺物整理で重要なものを報告する。

住居跡7からは古墳時代前期の土師器壺(1・2)、甕(3)、鉢(4・5)、甑形土器(6・7)などが出土している。甕・鉢の外面には、細かい刷毛目が施され、甕の口縁端部は若干肥厚気味であり、布留式でも早い段階のものである。

甑形土器は、炉から出土したもので、裾部に凸帯と把手を貼り付けた破片(6)と小形の把手(7)が出土している。その器形からみて、いわゆる山陰型甑形土器と称されるものであり、6は裾部径約14cmの小形品に属す



挿図3 17-F・G・J地区 井戸平面図・断面図

る。炉からは、鋸びついた4本の鉄鎌(10)も出土している。

8も裾部に凸帯を貼り付ける小形品であるが器形はよく判らない。

井戸からは、和泉型の瓦器椀(11～13)、土器師皿(14)、東播系須恵器の甕(15)、石鍋(16)が出土している。

今回の調査では、郡衙北側の弥生時代後期から古墳時代前期かけての大集落跡の一端や、また中世にも集落の営まれたことを知ることができた。

住居跡7から出土した山陰型盤形土器は、島根・鳥取両県を中心に分布し、広島・兵庫・愛媛・京都北部も分布が認められる。従来の調査では、豊中市利倉西遺跡がその東限であったが、今回の出土によってより東方へ拡がっていることが確認された。その用途は、調理用や煙道という実用的な考えと、祭祀的なものを強調する考えがあるが、住居跡7の炉からは鉄鎌が同時に出土しており、祭祀的色彩が強く感じられる。

また、今回出土した2点は胎土・色調からみて、当地域で生産されたものである。ほかに当地域では、山陰型とされる鼓形器台も出土しており、山陰地方との文化交流の活発さを知ることができる。(橋本)

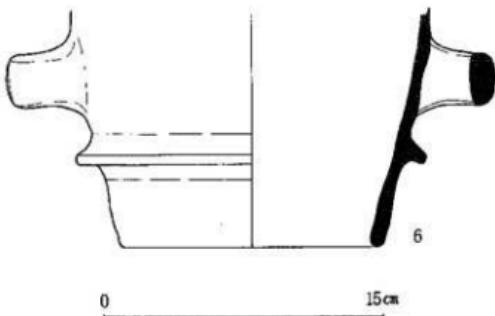
2. 37-A・E・I・M地区の調査

高槻市清福寺町982-1番地他にあたり、小字名は大井田と称する。現状は水路であるが、このたび水路改修の目的で現状変更許可申請書が提出されたため、文化庁・大阪府教育委員会など関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査地は、嶋上郡衙跡の新期郡庁院と推定されているところにあたり、トレンチはその推定地の西寄りを南北に縦断するかたちになる。トレンチの長さは90m、幅は0.7mである。調査は既存水路の堆積土を小型ユンボで排土し、その後人力で遺構面までの掘り下げをおこなった。

基本層序は、茶灰色土層〔表土層〕、灰褐色砂質土層ないし砂層〔整地層〕、淡茶褐色土層、淡褐色土層、茶褐色土層〔上部包含層〕、暗茶褐色土層〔下部包含層〕、地山となる(図版第66)。地山は大半が淡灰色粘質土層、一部が褐色砂礫層であって、北側から南側へゆるく傾斜しており、北端と南端の比高差は0.6mを測る。北端部での標高は15.5mである。

また遺物包含層のうち、上層のものは調査区南端から約30m以南に認められ、下層のものも



插図4 17-F・G・J地区 住居跡7出土遺物

調査区南端から25mのところで途切れている。

遺構(図版第4・5・66・67)

遺構としては、柱穴・土壤・溝を検出した。

柱穴は方形で、掘方のしっかりしたものと円形ないし不整円形のものがある。方形のものでは、一辺0.8~1.0mを測るものが5個、0.5~0.6mのものが4個ある。前者のうち、北寄りの柱穴1(一辺0.85m・深さ0.4m)では径0.2mの柱根が遺存していた。材はヒノキかコウヤマキとおもわれる。埋土の大半は暗灰色粘質土で、上部には暗灰褐色土が落ち込んでいる。なおこの柱穴の北側3.2mのところには、十段1に切られたかたちで柱穴2があり、柱穴1と対になる可能性がある。埋土は暗灰褐色土である。また南寄りでは0.9mの間隔をおいて検出した二つの柱穴(3・4)から、根固めに用いたとかんがえられる長さ15~20cmの川原石が数個ずつ作出している。後者では南端部の3個の柱穴(6・7・8)が3m間隔で直列に並んでいたが、建物としてまとまるかどうかは疑問である。円形ないし不整円形の柱穴は合わせて13個検出した。直径は0.2~0.7mとばらつきがあるが、概して小さなものが多く、はたして柱穴といえるかどうか甚だあやしい。

土壤は北端部で2基検出したが、調査区が狭小なため完掘できていない。土壤1は幅1.6m・深さ0.35mを測り、炭とともに多くの木片が出土している。木片のなかには、一端が黒く焼け焦げたものや削りくずのようなものが含まれていた。埋土は黒褐色土である。土壤2は幅1.1m・深さ0.25mを測る。埋土は暗褐色土である。

溝は2条検出した。溝1は中央部で東西方向にみとめられた。北側の肩は二段掘りになってしまい、全幅は2.7m、中段での幅は2.1mとなり、深さも上端からでは0.6m、中段からでは0.45mとなる。断面形は皿形を呈している。埋土は下から暗灰色土層・暗灰色土(含植物遺体)層・暗灰色粘質土層(縞状の堆積土層)・暗褐色腐食土層で、その上は遺物包含層で覆われている。なお南肩部にも幅0.7m程度で浅く削られた跡があり、この溝に伴う施設であったとかんがえられる。溝2は溝1の南側5mのところに設けられたもので、幅3.5m、深さ0.6mを測る。断面は上部のひらいたU字形を呈し、埋土は暗灰色粘質土層と茶褐色土層である。

遺物(図版18a・21a)

遺物は遺構や包含層から弥生時代~奈良時代にかけての土器をわずかながら検出しているが、その大半は上師器・須恵器の細片である。柱穴8からは、これら上器片とともにスサをまじえた焼土塊の一部(1・2)や後期弥生土器の甕片(3)が出土している。上層1からは古墳時代後期の須恵器片(杯4・器台5)、奈良時代の土師器片(鍋6・杯7)・須恵器片(杯蓋8・甕)、製塙土器片(9)が出土している。また溝1からも奈良時代の土師器(杯10・甕11)の細片がわずかに出土している。そのほかでは包含層から検出した土師器高杯(12)・甕(14)、須恵器壺底部(13)・細頸壺(図版第21a)などの破片が若干みられる程度である。細頸壺は口部のみの遺存で、口径7cmを測る。

小結

今回の調査は、推定新期郡庁院(鷲上郡衙跡新期郡庁院の推定復元「鷲上郡衙跡概要・9」)の中央部西寄りに南北方向のトレーナーを設けることになったが、調査区が狭小なため、庁屋の類を端的に指摘できるほどの資料は得られなかった。しかし遺構のなかには根固め石のみられる柱穴や柱根を遺す柱穴、あるいは溝1などはその可能性を示すものであろう。

まず柱根のある柱穴1は、柱穴2と組み合うものとすれば、芯芯間は最大で2間半分(約4.5m)とることができ、梁間3間(1間1.5m)もしくは梁間2間(1間2.2m)の東西棟が復元されることになる。この場合、柱筋はN-8°-E前後となる。また根固め石がみられる柱穴3・4は、すぐ北側にある柱穴5とN-10°-E前後の方向で一列にならび梁間2間(1間1.8m前後)の東西棟とすることも可能である。

溝1は浅いわりには幅のある溝で、二段掘りの掘方や南肩の削りこみとともに特異な断面形を呈している。そして溝の北側と南側とでは地山の高さが異なり、北側が0.2m高くなっている(図版第66)。さらに溝1が等高線に沿うかたちで掘削されていることなどからすると、北側と南側の地域を区分する意味合いをもつとのとかんがえられる。この溝を推定郡庁院のなかにあてはめた場合、ちょうど郡庁を南北に二分するかたちになる。このようなことは、郡庁院址を検出している他の遺跡にも例がなく、不都合なものとなる。むしろ当該溝以北の一画をもって郡庁院とすべきかもしれない。

各遺構の時期については併存遺物が少なくきめてに欠けるが、その方向性とこれまでの調査例とを勘案すれば、柱列や溝跡はおおむね奈良時代末から平安時代前半とかんがえられる。また土壌1については、柱穴2を切っており平安時代以降のものであろう。ただ調査区の制約からそれぞれの遺構がどのように展開するかは、東西にある未発掘区での発掘調査や整備事業に待ちたい。最近栗太郡衙跡とかんがえられる滋賀県栗東町岡遺跡で、郡衙の構造や建物の配置がよくわかる遺構群が検出されており、郡衙跡のひとつの典型例として評価されるものである(シンポジウム「栗太郡衙」滋賀の文化遺産を守る会・皇子山を守る会)。そこで郡庁院は、ほぼ半町四方の範囲を長屋で取りかこみ、中心のやや奥まったところに庁屋を配して正面に門を設けたもので、院内にはほかに総柱の建物跡が一棟みられる程度である。『和名抄』の栗太郡の項には物部をはじめとする5郷が記されていて、おなじクラスの鷲上郡衙の郡庁院もかくあるのかとおもわれる。将来に期したい。(森田)

3. 5-M・N地区の調査

高槻市郡家本町318番地にあたり、小字名は東馬場と称する。現状は水田である。このたび、個人住宅を新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北部に位置し、式内社・阿久刀神社の西側約150mにあたる。調査は、周辺部の調査によって遺構の分布が濃密な地域であることが判明しているため、申請地を東側と西側に2分割し、耕土・包含層の耕土を反転しておこなった。基本的な層序は、耕土(0.15m)、茶褐色土層(0.2m)[遺物包含層]で、その下は黄褐色粘土層の地山になる。

地山面の標高は、北端で19.1m、南端で19.0mを測り、ほぼ水平な地形を呈している。

遺構(図版第6・7・65)

検出した遺構は、竪穴式住居跡8棟、掘立柱建物3棟、井戸1基、溝4条、土壙3基、落ち込み2ヵ所と柱穴多数があり、調査区のほぼ全域にわたって認められた。特に今回の調査区は、鳴上郡衙跡の範囲の中でも居住地域として適していたらしく、各時期の遺構が重複して同一地山面で検出された。

住居跡1は、調査区の南東部で検出した方形のプランをもつもので、南側の一部は調査区外にある。規模は東西辺5.1mを測り、南北辺は磁北より西に約20度振っている。住居跡の掘り込みは、北壁で0.2m、東・西壁で0.15mである。周溝は幅0.25m、深さ0.1mを測り、底面はほぼ水平である。北辺の中央部には、焼土面が径0.8mの範囲にわたって認められる。住居跡の埋土は暗褐色土層で、土師器杯(2)、土師器皿(3・4)が中央部付近から出土したほか、須恵器・土師器が少量出土している。時期は6世紀後半頃のものである。

住居跡2は、住居跡1のすぐ北側で検出した大形の方形プランをもつもので、東側が井戸によって攢乱をうけており、北側の一部は調査区外にある。規模は南北辺約7mを測り、南北辺は磁北より西に約33度振っている。住居跡の掘り込みは、西壁で0.1m、南壁で0.15mと浅く、周溝は幅0.2m、深さ0.05mを測る。床面はほぼ水平で、4柱穴の掘形は径1m、深さ0.8mの円形の大きなものが3ヵ所確認されている。埋土は暗褐色土層で、須恵器・土師器片が若干出土している。時期は明確でないが、古墳時代後期のものである。

住居跡3は、調査区の中央北寄りで検出した方形のプランをもつもので、北側の大部分は調査区外にあり、住居跡内も後世の各遺構によって攢乱をうけている。規模は明確でないが、南北辺は磁北より約20度西に振っている。埋土は暗褐色土層で、須恵器・土師器片が少量出土しているが、時期は明らかにすることできなかった。

住居跡4は、調査区の東側で検出した方形のプランをもつもので、東側の大部分は調査区外にあり、北側は新しい住居跡2によって掘り下げられており、遺存状態は非常に悪い。そのため規模等は明確でなく、時期についても、出土遺物がほとんど検出されなかつたため、明らかにすることできなかった。

住居跡5は、調査区の南東隅で検出した方形プランをもつもので、大部分は調査区外にある。時期は新しい住居跡1によって切られているため、6世紀でも中頃のものであろう。

住居跡6は、調査区の北東隅で検出したものであるが、大部分は調査区外にあり、しかも南側は井戸の掘形によって攢乱をうけているため、規模等は明確でない。周溝は幅0.2mのものが接して2条認められることから、建て替えがあったことが考えられる。時期は出土した須恵器片などから、6世紀後半頃のものと考えられる。

住居跡7は調査区の南西隅で検出した隅丸方形プランをもつもので、南側の大部分は調査区外にあり、東側は新しい溝1によって切られている。住居跡の掘り込みは、北壁で0.2mを測り、周溝は東壁下のみ認められる。磁北より西側に約40度振っている。北辺の中央部には、幅0.6m、長さ1mの範囲にわたって焼土面が残っており、焼土中から支脚に利用さ

れた土師器の高杯片が出土した。埋土は暗褐色土層で、須恵器片・土師器片が若干出土した。時期は6世紀でも後半頃のものと推定される。

掘立柱建物1は、調査区の中央部南側で検出した東西棟建物である。桁行4間（柱間1.75m）×梁間3間（柱間1.8m）と推測されるが、南西隅は調査区域外にあり明確でない。棟方向は、磁北より西に約38度振っている。柱穴の掘形は、不整形な円形を呈し、深さは0.8mを測り、他の柱穴と比べて深い。柱の掘形の切り合い関係から、建物3よりも古いことがわかる。

建物2は、調査区の北西部で検出した東西棟建物で、桁行3間（柱間1.78m）×梁間2間（柱間2m）である。棟方向は、磁北より西に約40度振っている。柱穴の掘形は、円形および不整形な方形を呈し、深さは約0.5mを測る。掘形の切り合い関係から建物3よりも古いことがわかり、建物1と同時存在の可能性が強い。

建物3は、調査区の中央部西側で検出した南北棟建物である。桁行4間（柱間1.87m）×梁間3間（柱間1.53m）で、北側から1間目に間仕切りがある。棟方向は、磁北より西に約20度振っている。柱穴の掘形は、全体的に正方形のものが多く、深さは0.4mを測る。時期は出土遺物が少ないと明確でないが、奈良時代のものであろう。

井戸は、調査区の北東隅で検出した円形の素掘りのもので、東側の一部は調査区域外にある。規模は直径約3m、底径0.7m、深さ約2mを測る。埋土は2層に分けられ、上層が暗灰色礫土層で、下層が暗灰色粘土層であり、両層より弥生土器・土師器・須恵器片が若干出土した。時期は出土遺物が少なく明確でないが、奈良時代後半頃のものであろう。

溝1は、調査区の南西部で検出した南北溝で、幅は1~1.4m、深さ約0.25mを測る。埋土は暗褐色土層であり、土師器・須恵器片が若干出土した。時期は明確でないが、住居跡7を新しく切って掘られていたことから、7世紀に入るものであろう。

溝2は、溝1のすぐ東側を平行して走る南北溝で、幅は0.4~0.7m、深さ約0.25mを測る。埋土は暗褐色土層であり、弥生土器・土師器・須恵器片が若干出土した。時期は明確でないが、建物3の柱穴の掘形が新しく切っており、溝1と同様に7世紀代に入るものである。

溝3は、調査区の北西部で検出した東西溝で、溝2まで延びておらず、調査区内で終っている。規模は幅0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は暗褐色土層であり、弥生土器片を若干出土した。時期は弥生時代後期後半のものである。

土壙1は、調査区の中央北寄りで検出したもので、プランは円形を呈する。規模は短径1.1m、長径1.3m、深さ0.25mを測る。埋土は灰褐色土層であり、土師器・須恵器・瓦器片を少量出土した。時期は13世紀初頭頃のものである。

土壙2は、土壙1のすぐ東側で検出されたもので、プランは不整形な長円形を呈する。規模は短径1m、長径2.2m、深さ0.6mを測る。埋土は暗褐色土層であり、土師器・須恵器・瓦器片を少量出土したほか、完形の瓦器挽2個体が底部より検出された。時期は13世紀初頭頃のものである。

土壙3は、住居跡2の中央部で検出されたもので、プランは調丸方形を呈する。規模は短

辺0.7m、長辺1m、深さ0.25mを測る。埋土は暗茶褐色土層であり、焼土と須恵器片が若干出土した。時期は明確でない。

土壤4は、調査区の中央部で検出されたもので、プランは不整形な長方形を呈する。規模は短辺1.1m、長辺1.8m、深さ0.3mを測る。埋土は2層に分けられ、上層が暗灰褐色土層、下層が暗褐色土層であり、両層より赤土器・土師器・須恵器・瓦器片が少量出土した。その他の遺物としては、鉄鋤が1点ある。時期は瓦器碗などから13世紀初頭と考えられる。

遺物(図版18b・19・20・挿図5)

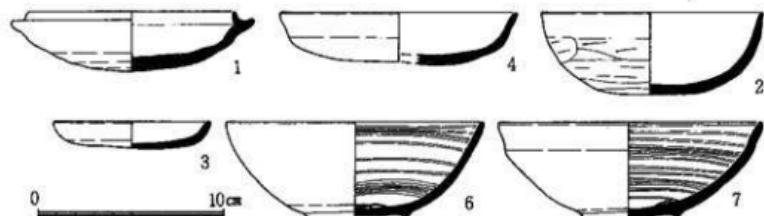
遺物の出土量は、検出した遺構の割には少なく、大部分は小さな破片の状態で出土した。時期は弥生時代から中世までの遺物が出土しているが、弥生時代のものは少なく、古墳時代と中世のものが量的に多く認められる。

弥生時代の遺物は、住居跡・溝・柱穴から出土した破片が少量ある。いずれも小破片ばかりであって、完形に復元できたものはない。器種としては、壺・高杯・鉢・甕があり、時期としては弥生時代後期後半のものばかりである。

古墳時代の遺物は、各遺構から出土しているが、いずれも小破片のものばかりで、完形に復元できたものは須恵器杯身(1)と土師器杯(2)のみである。1は落ち込みから出土したもので、底部に丁寧なヘラ削りを施しているが、受部の立ちあがりは内側に低く傾斜しており、時期的には6世紀末頃のものであろう。2は住居跡2から出土したもので、口縁部外面上部を横ナデし、その以下はヘラ削りをしている。

奈良時代の遺物は、弥生時代のものより出土量は少なく、完形に復元できたものはない。5はカマド破片である。外面は粗い刷毛調整が施され、内面には粘土紐の接合痕が顕著に認められ、ススが少し付着している。16は平瓶の把手である。丁寧なヘラ削りによって正方形につくっている。

中世の遺物は、土壤・柱穴・包含層中からの小破片であるが、多量に出土した。器種としては瓦器(椀・皿)、瓦質土器(羽釜・甕)、土師器(皿・羽釜)、須恵器(鉢・甕)、白磁(碗)等がある。土師器皿(3・4)は住居跡1の埋土から出土したもので、口縁部外面上部に横ナデ調整を施している。胎土は3が砂粒を含まない灰白色のもので、4は砂粒を多く含み黄灰色を呈する。瓦器碗(6・7)は、土壤2から出土したもので、口縁部は横ナデし、高台は断面



挿図5 5-M・N地区 出土遺物 落ち込み1(1), 住居跡1(2~4), 土壤2(6・7)

三角形で細い。暗文は内面のみに施し、全体的に粗く、中央部は省略している。胎土はいずれも精良で灰白色を呈する。時期は13世紀初頭頃のものと考えられる。8は土壙4から出土した鉄滓である。形状は半球状を呈し、全体に泡をふいており、球外面は小石混りで鉄サビが認められる。法景は径約6cm、厚さ4cm、重量165gを測る。鉄滓はわずかに1点であるが、本遺跡では初の出土品であり、北側調査区から出土したフイゴの羽口などとともに、この付近一帯で鉄鍛冶がおこなわれていたことを示す貴重な資料の一つである。(大船)

4. 54-B・F・J・N地区の調査

高槻市郡家新町352番地にあたり、小字名は林田と称する。現状は水田である。このたび宅地造成工事の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に調査を実施した。

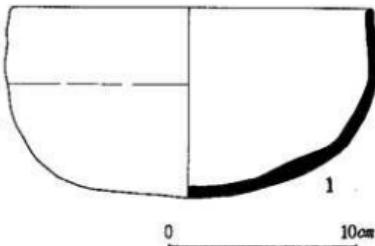
今回の調査地は、嶋上郡衙跡の西南部に位置し、昭和52・53年度におこなった旧石器時代のキャンプ跡の調査地(64-B・F地区)のすぐ北側にあたる。したがって旧石器時代の遺構を検出すべく、重機による排土は耕上・床上までとして、それ以下は人力による掘削をおこなった。基本的な層序は、耕上(0.1m)、床土(0.1m)、黄褐色粘質土層(0.2~0.3m)、灰色砂質粘土層(0.3~0.4m)となり、その下は灰褐色粘質土の地山となる。なお灰色砂質粘土層の上半部や上面には客土である暗灰色土の土塊がしばしばみられ、その上にある黄褐色粘質土層も整地層とかんがえられる。地山面はかなりの起伏がみられ、標高は15~15.5mを測る。

遺構・遺物(図版第21b・c・挿図6)

調査は南端部を中心に精査したが、II石器時代の遺構は検出できず、ほかの時期の遺構も認められなかった。とりわけII石器時代の遺構は南側の調査区に引き続いでその検出が期待されたが、地山である灰褐色粘質土を1mちかく掘り下げても果たせなかった。また地上面も後世に削平をうけた形跡もなく、むしろ客土されたとかんがえられることから、II石器時代のキャンプ地の広がりは当該調査区までおよんでいなかつたと判断される。したがって64-B・F地区で検出したキャンプ地跡は、郡家今城遺跡で析出した1単位に相当するだけで、小規模なものであった可能性が高い。ただ東側への広がりについては今後に残された課題となろう。

遺物も原位置で検出したものは皆無で、客土中にみられる暗灰色土(かつての遺物包含層)内から出土する二次的なものばかりである。2・3・4は弥生時代中期の壺・甕片で、5は古墳時代後期の須恵器(瓶)片、6・7・8は奈良時代の土師器(杯蓋・鍋・甕)片である。また1は奈良時代の鉢で唯一復元できたものである。いずれも風化がはげしく調整など、不明なものが多い。

当該調査区周辺では、上記の旧石器時代の



挿図6 54-B・F・J・N地区
整地層出土遺物

キャンプ地を除けば、まったくの無遺構・無遺物地帯で、島上郡衙の西南外辺部にあたるとかんがえられる。最近の調査結果によると、北東部にある郡衙本体との間には幾筋もの自然流路が認められ、これが郡衙域の西南の境となるのであろう。そしてその一画で検出した構造遺構では、祭祀遺物である未使用錢の「隆平永宝」7枚が芥川廃寺の瓦類とともに出土していて、郡衙域の四至における祭祀の一端をうかがうことができる。それゆえにこの地区での今後の調査では、北側にある芥川廃寺跡の南辺域の状況を追及することが主眼になるのであろう。(森田)

5. 54-C・G地区の調査

高槻市郡家新町354番地にあたり、小字名は林田と称する。現状は水田である。このたび宅地造成工事の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に調査を実施した。

今回の調査地は島上郡衙跡の西南部に位置し、上記調査区の東側にあたる。基本的な層序は、耕土(0.1m)、床土(0.1m)、黄褐色粘質土層〔整地層〕(0.2~0.3m)となり、その下は灰褐色粘質土の地山となる。地山面の標高は15.2mを測る。

調査は重機で耕土・床土・整地層を除去後、遺構検出作業をおこなった。その結果、調査区の北半部において2本の自然流路を検出した。ひとつは幅1.4m・深さ0.1mを測る浅いもので、東西方向の流れをしめしている。埋土は暗灰褐色粘質土である。もうひとつはその南側で検出したもので、幅1.5~2.1m・深さ0.2mを測り、やや蛇行気味に南東方向へ流れている。埋土は下から灰褐色粘質土・暗灰色粘質土・暗灰色土となり、それぞれは数cmの堆積土層である。ほかには遺構らしきものは検出されなかった。なお、遺物はまったく出土しなかった。隣接する調査区と同様に島上郡衙跡の外辺部にあたるものとかんがえられる。

(森田)

6. 54-C・D・G・H地区の調査

高槻市郡家新町355番地にあたり、小字名は林田と称する。現状は水田である。このたび宅地造成工事の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に調査を実施した。

今回の調査地は、島上郡衙跡の西南部に位置し、上記調査区の東隣にあたる。基本的な層序は、耕土(0.1m)、床土(0.1m)、黄褐色粘質土層〔整地層〕(0.2~0.3m)となり、その下は灰褐色粘質土の地山となる。地山面の標高は15.2mを測る。

調査は重機で耕土・床土・整地層を除去後、遺構検出作業をおこなった。その結果遺構はまったく検出されず、調査区の南半部において自然の落ち込みを検出したにとどまる。また遺物も出土しなかった。隣接する調査区と同様に島上郡衙跡の外辺部にあたるものとかんがえられる。(森田)

7. 45-I・J・M・N地区の調査

高槻市郡家新町254番地にあたり、小字名は高津と称する。芥川廃寺と山陽道の中間に位

置し、北側は史跡指定地に接している。現状は水田である。このたび宅地造成工事にさきだって土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地一帯では、これまで水路改修に伴うもの2件のほか、宅地造成工事にさきだって2件の調査が実施されているが、南約50mの地点で山陽道にはほぼ平行する溝が検出されたほかには、奈良～平安時代の遺構は検出されていない。しかし、本調査地は芥川廃寺の南正面にあたる重要な地域であり、関係遺構の存在が予想されたため、調査区を南北に分け重機を使用して耕土・整地層を除去したのち遺構検出手作業をおこなった。

基本的な層序は耕土(0.2m)、黄灰色粘土〔床土〕(0.15m)、暗褐色土〔整地層〕(0.1～0.25m)、砂礫まじり黄褐色土(0.3m)、淡褐色～暗褐色砂質粘土(0.1～0.2m)、青灰色砂礫〔地山〕である。調査区の北西から南東にかけて自然流路が継続しているため、調査区北東側では砂礫まじり黄褐色土、南半では青灰色砂礫上に堆積した淡褐色砂質粘土が遺構検出手面となっている。全体として北東から南へゆるやかに傾斜している地形で、遺構検出手面は標高15.4～15.0mを測る。

遺構(図版第10～12・70)

検出した遺構は、自然流路、不整形の土壤および総柱の掘立柱建物2棟がある。このうち調査区北側で検出した土壤は遺物がほとんど出土せず、堆積状況からして粘土採取場もしくは風倒木等と考えられるので、記述は省略した(平面図では網点で示している)。

自然流路は、北西から南東にかけて調査区を継続するかたちで検出した。全体の幅は約25m程度である。底面は北から南東へゆるやかに傾斜している。堆積土は、黒褐色砂質粘土層と暗褐色砂層の互層で、一部に黄褐色砂層がみとめられた。後述する建物2は、自然流路が一定埋まった段階で建てられたもので、遺構検出手面と同レベルでは、淡褐色砂質粘土(遺構検出手面)の西側にひろがる暗褐色砂上面に黒褐色粘土が縞状に点在しているのがみとめられ、流路中央部は長期にわたって幾筋もの流れが錯綜していた状況であったと推定される。表層の黒褐色粘土層中から、II石器～奈良時代の遺物が若干出土した。

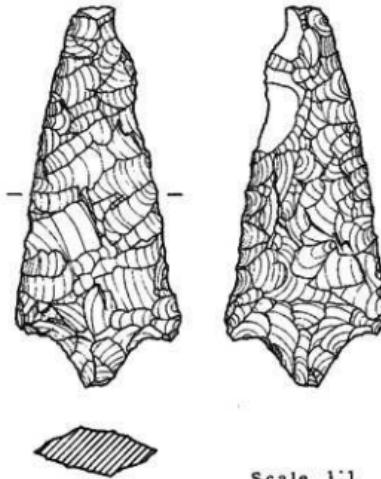
建物1は調査区東端中央部で検出した。3間×3間の総柱建物で南北約4.5m(柱間1.5m)、東西約3.9m(柱間1.3m)、平面積は17.5m²を測る。柱筋の方位はN-5°-Eである。柱穴掘形は1辺0.5～0.8mの方形で、深さ約0.2～0.4mを測る。南西隅の柱穴では礎板、そのすぐ東の柱穴では柱根が遺存していた。礎板は約45cm×30cm・厚さ3cm、柱根は直径約25cmを測る。柱穴埋土は暗褐色土で、少量の上器片・埴輪片が出土している。

建物2は建物1の南側6.0mを隔てて、II流路上で検出した。3間×3間の総柱建物で、南北約5.2m、東西約4.2mを測り、南北に長い。平面積は21.8m²である。柱筋は建物1と同じくN-5°-Eで、東の柱筋が建物1のそれと並んでいる。南北の柱間は、北から1.4m・2.4m・1.4m、東西の柱間はいずれも1.4mを測る。柱穴は1辺0.8～1.1mの方形で、深さ0.8～1.0mを測る。柱は抜きとられていて残っていないが、6つの柱穴から根石ないし根固め石を検出した。根固め石からみて柱の直径は35～40cm程度と推定され、建物1のそれより

も太いものと考えられる。柱穴埋土は、おむね上層から黄褐色砂礫・暗褐色土・青灰色砂礫混じり黒褐色粘土である。埋土中からはごく少量の土器片、有舌尖頭器などが出土地した。

なお、南北に隣あう柱穴2つをつなぐように掘られた掘形を、西・南の4ヶ所で検出した。いずれも北側が浅く、南側が深く落ち込んでいる。また東柱筋の柱穴4個はそれぞれ東側へ掘形が張り出していた。断面観察や埋土の状況からして、これらは柱の抜きとりの際に掘られたと考えられる。とくに南柱筋の柱穴では、抜き取った柱材をはつた残材が、連結部から柱穴内に落ち込んだような状態で検出された。

遺物(図版第30・31・挿図7)



挿図7 45-I・J・N・O地区
有舌尖頭器

調査面積約16aに対して、出土した遺物は整理箱1箱分にすぎず、遺存状態もよくない。

建物1柱穴からは1~4が出土した。須恵器杯蓋1は内面に断面三角形の短いかえりがつくもの。土師器杯2は内面に放射文がのこる。3は壺の底部分、4は円筒埴輪片である。5~8は建物2柱穴出土。5は土師器壺口縁部。口縁端部に1条の沈線がめぐる。鏡口縁部6は、端部がほぼ垂直の平坦面をなし内面はわずかに肥厚する。7は高台のつく杯で、口縁部下半は内湾、上半は外反する。壺8は口縁部がほぼ直立し端部内面がわずかに肥厚する。有舌尖頭器(図版第31b-1)は、現存長6.6cm、幅2.9cm、厚さ1.0cm、重さ15.5gを測る。緑灰色の縞のはいった黒灰色半透明のチャート製で、ていねいな押圧剝離が両面にほどこされ、断面菱形を呈する。先端部と舌部を欠失しており、復元長は

約7.5cmと推定される。市域で5例目でチャート製としてはほかに南平台丘陵(尼ヶ谷古墳群)出土品がある。

自然流路から出土したものに弥生時代後期の土器片9~11、古式土師器片12・13、須恵器杯蓋20などがある。12は河内産の庄内式甕とみられる。13は布留式甕の特徴を有する。杯蓋20は、天井部からなだらかに口縁部へ移行し、端部は丸くおさめる。6世紀前半。このほかサヌカイト片3点、石鎚の破片1点が出土している。

整地層出土、14・15は奈良時代の杯。14は半底で斜め上方にひらく短い口縁部がつく。端部は丸くおさめ内面へ肥厚する。瓦は17~19の3点だけである。丸瓦18・19は、凹面に布目圧痕、凸面に縄叩目がのこる。厚さ1.2cm、黄灰色を呈し軟質。須恵器は6世紀代のものが大半を占めるが、8世紀末~9世紀初めのものもみられる。21~24蓋杯、25・26高杯、27は甕腹である。6世紀。杯28は斜め上方へ内湾気味に口縁部がのびるもの。端部は丸く、内傾

する平坦面をつくる。29はやや内弯する体部に、外反する口縁部がつく。硬質、灰白色精良な胎土で内面に灰釉がかかり、灰釉陶器とみられる。

小 結

本調査区では、芥川廃寺に直接かかわるとみられるような遺構は検出されなかつたが、寺跡南方ではじめて奈良～平安時代の建物遺構を検出し、鷲上郡衙について新しい知見を得た。

今回検出された総柱の掘立柱建物2棟は、

- ①南北に並ぶ2棟の建物は、どちらも平面規模が3間×3間で柱筋の方位を同じく(N-5°-E)しており、東の柱筋が揃っているなど、計画的に配置されている。
- ②建物・柱穴の規模形状等からして、2棟は倉庫とみられる。とくに建物2の柱穴は、方約1m、深さ約1mを測る大規模なものである。
- ③建物2の柱間は、南北3間のうち中央の1間が広い、特異な形態を示している。

などの点で注意される。造営時期は、出土した遺物が乏しく明確にできないが、建物方位が新しい時期の郡衙遺構(N-5°~10°-E)とほぼ一致しており、また柱穴埋土から出土した土器は8世紀代のものと判断され、整地層に灰釉陶器をみとめたことから、おおむね8世紀中頃～後半とかんがえられる。東の柱筋が同一線上にあって南北に並ぶ配置を示すから、同時存在の可能性が高いが、平面積や柱穴の規模の違いをみると、若干のずれがあるのかもしれない。

なお、建物2の柱間について、南北3間のうち中央が広いのは、入り口の扉を取り付けるためかとかんがえられるが、他に類例をみないものである。(鍾ヶ江)

8. 16-B・F地区の調査

高槻市清福寺町 895-1番地にあたり、小字名は大畠である。現状は宅地で、このたび仓库・事務所の建設に先立ち土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、式内社・阿久刀神社の南約100mにあたり、周辺部の調査では弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が数多く検出されており、鷲上郡衙の成立や変遷を考えるうえで重要な地点である。

遺 構(図版第8・挿図8)

調査は届出地に8m×31mの調査横を設定して実施した。層序は、調査区東壁でみると、盛土(0.5m)、耕土(0.2m)、青灰色土(0.2m)、床土(0.05m)、暗褐色土(0.1~0.3m)と堆積し、地山は黄褐色土である。調査区の北側半分は地山に拳大の礫が数多く混入しているが、南側半分ではほとんど混入していないかった。このため、遺構は主に南側半分で検出された。

遺構には、溝、不定形土壙、柱穴がある。溝1は、調査区を横断するように検出されたもので、幅約2m、深さ0.2~0.3mを測る。南側の肩部は直線的にしっかりと掘削されていたが、北側は不明瞭であった。溝内から弥生時代中期の壺などが出土している。

土壙はいずれも溝1の南側で検出された。土壙1は長さ約4m、幅1.2m、深さ0.4mを測

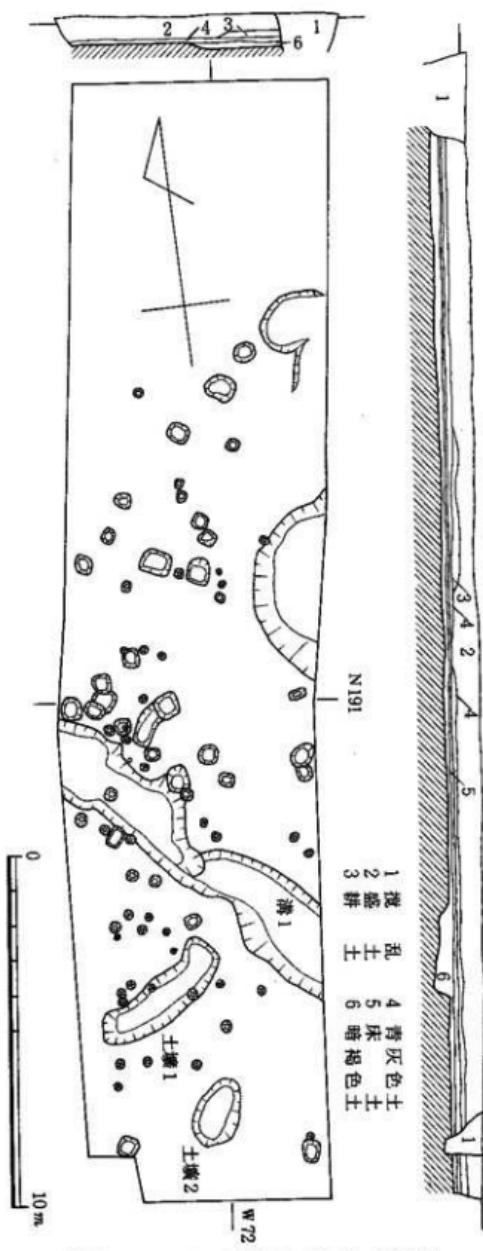


图8 16-B·F地区 平面图·断面图

りやや弯曲している。底部に接するようにして弥生時代中期の壺が検出されている。土壤2は長さ2m、幅1.2m、深さ0.5mを測る。時期は不明である。

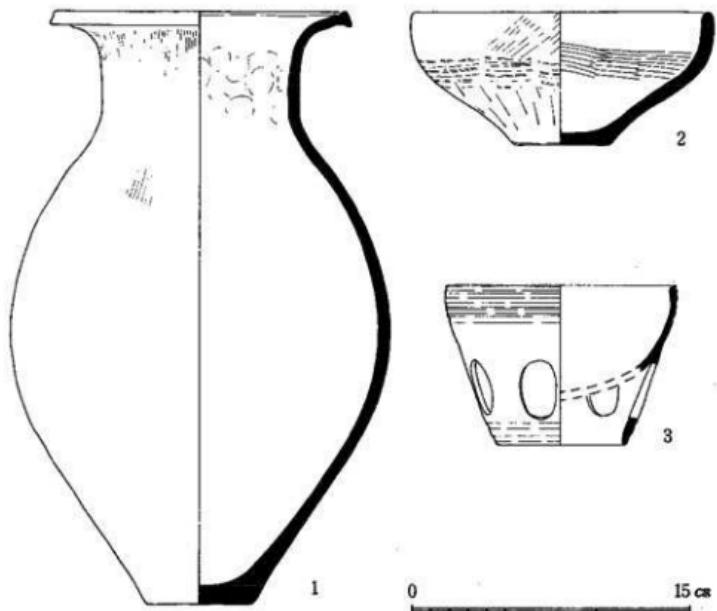
柱穴は溝1の周辺にまとまって検出された。柱穴内から出土した遺物からみて、直径0.2~0.3m程の円形のものは平安末、一辺0.6~0.7mの方形のものは奈良時代とみられるが、建物としてまとめることはできなかった。

その他、東壁ぎわで、浅い落ちこみが検出されたが遺物は出土しなかった。

遺物(図版第22・挿図9)

土壤1から弥生時代中期の壺(1)と鉢(2)、台付無須壺(3・4)が出土している。壺は長胴形で外反する口縁をもつ。外面は縱方向の刷毛目を施している。台付無須壺は、口縁部がやや内傾し、口縁部外面と台状部下端に2条の凹線を入れている。また、台状部には、2.5cm×3cmの梢円形のすかし穴を6個(復元による)設けている。胎土は褐色で雲母を含むところから牛駒西麓産とみられる。時期はいずれも第Ⅳ様式期である。ほかに、暗褐色土から弥生式土器(5~11)や須恵器器台(12)が出土している。

今回の調査では弥生時代中期の遺構の拡がりを確認することができた。また、まとまりを欠いているが、古代末~中世の集落跡の一端を知ることができた。(橋本)



挿図9 16-B・F地区 土壌1出土遺物

9. 23-D・H、33-D・H地区の調査

高槻市郡家新町277-2、278-2、279-2、280-2、338-2、339-2番地にあたり、小字名はフクヅカ、宮脇と称する。現状は道路である。このたび、道路の拡幅工事をする目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、芥川庵寺の西方約100mに位置する南北道路である。調査は拡幅する道路の路肩部分に限られたため、調査区は非常に細長いものとなってしまった。調査はまず重機で盛土・耕土・床土を除去し、その後人力で地山面まで掘り下げておこなった。調査区は、昨年調査を実施したフラーーセンターの北側と南側に分かれているため、調査地の名称も北側調査区、南側調査区と呼び分けることにした。

遺構(図版第9・68)

北側調査区は、幅1.5m、長さ約35mの細長い範囲である。検出した主要な遺構は、溝5条、土壙・柱穴などである。各遺構からは、弥生土器・土師器・須恵器片が出土したが、時期を決められる一括資料はない。層序は耕土(0.2m)、床土(0.1m)、暗褐色土層(0.2m)〔遺物包含層〕、黄灰褐色土層〔地山〕である。地山面の標高は北端で19.1m、南端で19mを測る。

溝1は、調査区の南側で検出した東西溝で、幅1.2m、深さ0.4mを測る。埋土は暗褐色土層であり、土師器・須恵器片を少量出土した。時期は奈良時代のものであろう。

溝2は、調査区の中央南側で検出した東西溝で、幅0.9m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色土層であり、弥生土器・土師器・須恵器片を少量出土した。時期は明確でないが奈良時代のものであろう。

溝3は、調査区の中央部で検出した東西溝で、幅0.4m、深さ0.05mを測る。埋土は暗褐色土層であるが、炭の堆積層が中央部で認められた。遺物は土師器・須恵器片が若干出土している。時期は奈良時代であろう。

溝4は、調査区の北側で検出した東西溝で、幅1.1m、深さ0.45mを測る。埋土は上層と中層が暗褐色土層、下層が褐色土層であり、弥生時代後期後半の土器片と庄内期の土器片が少量出土した。時期は古墳時代前期のものである。

溝5は、調査区の北側で検出した東西溝で、幅0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色土層であり、出土遺物は認められなかった。その他、土壙・落ち込みなど各種類の遺構も認められたが、調査範囲が限られたため、平面形・性格等を明らかにできたものは少ない。また、柱穴も多数検出されたが、平面形が方形を呈する奈良時代のものは、北側調査区ではほとんど認められなかった。

南側調査区は、幅1.5m、長さ110mの非常に細長い範囲である。検出した遺構は、竪穴式住居跡1棟・土壙・柱穴などであるが、南側の約70mの区間は浅い谷地形になっているために、遺構の分布はまったく認めることができなかった。基本的な層序は、耕土(0.2m)、床土(0.05m)、暗褐色土層(0.3m)〔遺物包含層〕、黄灰色土層〔地山〕である。地山面の標高

は、北端で18.6m、南端で16.9mを測る。

住居跡1は、調査区の中央北寄りで検出した方形プランをもつものであるが、西側の大部分は調査区域外にあり、規模等は明確でない。住居跡の掘り込みは、東・南壁で0.05mと非常に浅いもので、周溝は幅0.2m、深さ0.05mを測る。この住居跡の南北辺は、磁北に対して西に約28度振っている。埋土は暗褐色土層で、出土遺物は認められなかった。

その他、土壙・柱穴など多数の遺構を検出したが、調査範囲が限られたため、規模および性格等は明確にすることができなかつた。

遺物(図版第23~26a・77)

今回の調査区から出土した遺物は、弥生時代後期後半から奈良時代のものである。いずれも溝・遺物包含層中から出土したもので、大部分は南側調査区の北端の包含層中から出土した。

弥生時代の遺物は、遺物包含層中より出土した小破片のものばかりであつて、完形に復元できたものは1~3の3点である。1は二重口縁の壺である。口縁端部と稜線上に刻目が施され、円形浮文が付けられている。内外面は丁寧にヘラ磨きが施されている。2は小型の鉢である。上げ底風の底部から内弯ぎみに立ちあがり、大きく開いている。口縁端部はナデ調整がおこなわれていない。外面には一部ヘラ磨きが施されている。胎土は砂粒を多く含む。3は外面にタタキ目を有する弥生時代後期後半の典型的な甕である。体部は縦長の球形を呈し、口縁部は斜め上方に外弯する。口縁部は横ナデを施し、端部を丸くおさめている。底部は突出した半底を呈する。体部内面は刷毛調整が施されている。胎土は良好である。その他、上げ底風の壺の底部(24)、有孔鉢(25)、ヘラ描き沈線をもつ高杯(27)などがある。

古墳時代の遺物は、溝4から出土した庄内期の甕口縁部(22)、小型壺(28)、台付鉢(30)を除けば、遺物包含層中から出土した須恵器が中心となる。4~11は杯蓋であり、4は頸部をヘラ削りによって丁寧に仕上げているが、5~11はいずれもヘラ切りのままである。12~17は杯身である。12~17は底部をヘラ削りによって仕上げているが、13~16はヘラ切りのままである。焼成は全体的に良好で堅緻なもの(4~7・11~13・15・16)とやや不良で暗灰色を呈するもの(8・9・14・17)に分けられる。胎土は砂粒を多く含み、全体的に粗いものが多く認められる。18は高杯であるが、内面は粘土紐の痕跡が顕著に認められる。焼成はやや不良で、暗灰色を呈する。その他の器種としては、甕(31)、高杯(32・34・37)、短頸壺(33)、甕(35)、擂鉢(36)がある。その他の遺物としては、6世紀中頃の埴輪片が数点認められる。時期としては、6世紀末から7世紀初頭のものが中心的位置を占めている。

奈良時代の遺物は、古墳時代と比べると量的には多い方である。しかし、遺物包含層中の遺存状態が悪いこともあって、完形に復元できたものは少ない。19は須恵器の皿であり、底部に高台をつけたのち、内外面を横ナデしている。20は小型の土師器甕である。球形の体部に短く外反する口縁部がつく。体部の外面は粗い刷毛調整が施されているが、口縁部内面はナデ調整をおこなっている。38は杯で、内外面に放射状の暗文がある。39は小型壺の口縁部である。40は細かい刷毛目を施した甕である。41は鍋か釜の把手である。42・43は高杯の脚

部であり、42は脚部に7面の面取りがある。その他の遺物として、大型のカマド・羽釜・鍋・製塙土器などがある。(大船)

10. 14-K・L、15-E・F・J地区の調査

高槻市郡家本町303-1番地他にあたり、小字名は東馬場と称する。現状は水路である。このたび水路整備の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に調査を実施した。

調査地は、細長くかつ途中で屈曲しているので、南北方向をA区(1m×26m)、東西方向をB区(1m×80m)とした。調査は重機で表土を除去し、遺構面まで人力で掘りさげた。層序は耕土(0.2m)、整地層(0.2m)、暗褐色粘土層(遺物包含層)(0.2m)、黄褐色土層・黄褐色礫上層(地山)である。現地表面の標高は約19mを測る。

遺構・遺物(図版第26b-29・69・78・挿図10)

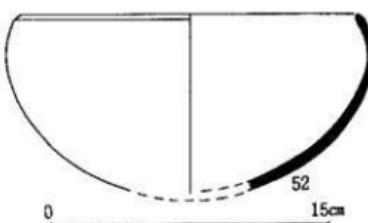
A区では、樋・柱穴・落ちこみを検出した。

樋は、3間分確認でき、柱間は1.04mを測る。各柱穴は1辺約0.5m、深さ約0.2m。方向はN-24°-Wである。掘立柱建物の一部分とも考えられるが、調査区が狭小なために確認することができなかった。

各遺構・包含層より若干の弥生土器(41)、土師器(44・46)、須恵器(48)が出土するものの、大半が細片であり遺構の時期判断の材料とするには乏しい。樋については、A区出土遺物のなかで7世紀代のものが多いことや、方向が磁北に対し西に偏っていることから、おむね7世紀に帰属するとかんがえられる。なお、昭和51年にA区東側で発掘調査が実施され、樋の東方2.5mで7世紀中頃の掘立柱建物を検出している(図版第69)。総柱で3間(4.5m)×3間(5m)の規模を有する倉である。柱通りの方向はN-22°-Wである。この建物と今回検出した樋は、時期・方向とも近似しており、両者の関連性が指摘できる。

B区では、柱穴・土壤・溝・落ちこみを検出した。

柱穴は溝1以西に比較的まとまって検出している。W 225~240間では、1辺0.5m前後、深さ0.2mを測り、一定の間隔をたもつものを5個検出したが、建物としてまとめるには至らなかった。



挿図10 14-K・L、15-E・F・J地区 土壌1出土遺物

土壌1は幅1m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色粘土で、拳大の焼土(22・23)を含む。弥生土器(16・18)、土師器(17・19・21)、須恵器(20・52)が出土した。52は淡灰色を呈する鉄鉢形の鉢である。底部を欠くが平底ふうの丸底であろう。7世紀前半頃。

溝1はB区中央で検出した南北溝である。幅1.6m、深さ0.5mを測る。埋土は暗褐色粘土で、1度埋土をさらえている。人頭大の石が多数埋

土中に混入し、これらの間から7世紀前半頃の土師器(杯・皿・鉢・高杯・甕・鍋)、須恵器(蓋杯・甕・横瓶)が出土した。完形品を含む。埋土や遺物出土の状況から、整地が行なわれた際に石とともに投棄されたのであろう。7は口径10cm、器高2.8cmを測り、内面は1段の正放射状暗文をほどこす。12は片口の鉢である。内傾した面をもつ口縁の一端を外方へ屈曲させ、注口をつくる。須恵器杯蓋(1)は口径10cm、器高3.2cm、かえりの先端は口縁部より下位にある。杯身(2~6・27)は口径8.5~10.7cm、器高3~3.8cmを測る。高台を付したものは出土していない。

包含層からは土師器、須恵器、黒色土器が出土した。7~8世紀代の土器が大半で、平安時代以降の遺物は黒色土器A類の碗(50)のみである。

小 緒

今回の調査では、7世紀を中心とする遺構・遺物を検出した。遺構は、A区南半・B区西半で比較的密に検出し、A区北半・B区東半では疎である。地山は、W190付近で北西から南東へ低い尾根がのびており、この周囲は黄褐色礫土である。そして遺構も少ない。これに対し、他の場所の地山は礫土層上に堆積した黄褐色粘土上で、遺構の分布は密になる。これは遺構形成に地山の状況が大きくかかわっていることを明示しているといえよう。

土壤1出土の焼土塊はスサを含んでいることから、人為的に火熱を受ける遺構にともなうものである。高槻市東部の梶原寺跡に隣接する梶原南遺跡では、羽口・鉄滓が出土しており、同寺の造営・修復に關係する集団の存在が推定されている。芥川庵寺北方の当該地周辺においても、帰属時期は不明確ながら、羽口4点・鉄滓1点が出土していることから、近辺で鋳造・鍛造等の生産活動をおこなっていたと推定される。土壤1出土の焼土塊もこれにともなう炉壁等の断片かもしれない。(宮崎)

11. 45-J・K・N・O地区の調査

高槻市郡家新町253番地にあたり、小字名は高津と称する。現状は水田である。このたび共同住宅建設にさきだって土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、史跡指定地に接し、今年度さきに調査した45-I・J・M・N地区のすぐ東隣にあたる。同調査区では奈良時代の総柱据立柱建物2棟を検出しており、関連遺構の存在が予想されたため、調査区を南北に2分し重機を使用して整地層までを除去したのち、遺構検出作業をおこなった。

基本的な層序は、耕土(0.25m)、床土(0.1m)、暗褐色土(整地層)(0.2~0.3m)、地山である。地山は調査区東部が黄褐色砂礫上に堆積した灰褐色粘土、中央部が黄褐色砂礫、西部が砂礫上に堆積した灰白色砂質粘土となっている。西部中央には暗灰色~暗褐色砂が浅く溝状に堆積していた。全体として北から南東へゆるやかに傾斜している地形で、地山面は標高15.6~15.0mを測る。

遺構(図版第10・13~15・70・71)

遺構は、古墳時代の竪穴式住居跡3棟・土器群・溝1条、奈良時代の掘立柱建物8棟(うち総柱建物3棟)・石組井戸1基、柱穴多数のほか川水路1条を検出した。旧水路を除きすべて地山面での検出である。土壤ないし溝状遺構が10基以上検出されたが遺物を共伴せず、遺跡形成前の落ち込みもしくは風倒木の類と考えられるため、記述は省略した(遺構平面図では網点で示している)。

(1) 古墳時代の遺構

住居跡1は、調査区東部で検出した。方形で1辺約4.2mを測り、幅0.15m、深さ0.05mの周溝をもつ。南東辺には0.8mの間隔をおいて幅0.2m、長さ0.15mの張り出し部がある。中央に長さ1.2m、幅0.7mの土壤を検出したが、性格は不明である。隅柱の柱穴は直径約0.3m、深さ0.1~0.2m、柱間は約2.1mを測るが、東南隅のものは後世の柱穴で失われている。床面から土師器が出土した。

住居跡2は、住居跡1の北側にあって住居跡3と重複しており、住居跡3より古い。幅0.2m、深さ0.05~0.1mの周溝を一部検出したのみで、規模・時期などは不明である。

住居跡3は幅0.15~0.2m、深さ0.05~0.1mを測る周溝のみ検出した。隅丸方形に復元でき、東西3.4m×南北3.8mを測る。

土器群は、調査区中央部で検出した。1.8m×0.6mの範囲から古墳時代の高杯・瓶・甕・甌などが人頭大の川原石とともに出土したが、掘形はみとめられなかった。焼土を作り、甌が高杯の上にすわった状態であったことから、墓壙あるいは住居跡とも考えられるが、確定できない。

溝1は、後述する建物3・4付近にはじまり、南々東へ直線的にのびている。幅0.2~0.3mを測り、深さは南へ向かって徐々に深く、調査区南端では上端幅0.3m、底部幅0.2m、深さ0.25mのU字形断面を呈する。埋土は黒褐色土1層で、埋土中から土器片が出土している。

(2) 奈良時代の遺構

掘立柱建物については、西隣の調査区で検出した2棟の建物との関連から通し番号で記述する。

建物3は、南北に長い2間×3間の総柱建物で、東西約3.6m(柱間1.8m)、南北約4.5m(柱間1.5m)、平面積16.2m²を測る。柱筋の方位はN-5°-Eである。柱穴掘形は1辺0.7~0.9mの方形を呈し、深さ0.4~0.7mを測る。南西隅・北西隅ほか、計4つの柱穴で柱根が遺存していた。柱根は直径約25cmを測る。また、中央の2つの柱穴では根石とみられる石組をみとめた。柱穴の埋土は暗褐色土・暗灰色粘土の2層で、ごく少量の土器片が出土している。

建物4は、建物3に重複して検出した。3間×3間の総柱建物で、建物3の建て替えである。規模は建物3と等しく、東西約3.6m(柱間1.2m)、南北約4.5m(柱間1.5m)、平面積は16.2m²を測る。柱筋は建物3よりやや東に振っており、方位はN-9°-Eで建物3と一致する。柱穴は0.5m×0.7mの長方形を呈し、深さ約0.4mを測る。柱穴の1つでは直径約20cmの柱根が遺存していた。柱穴埋土は暗褐色土で、埋土中からごく少量の土器片が出土している。

いる。

建物 5 は建物 3・4 の北側約 10m を隔てて検出した。柱間は梁間約 2.4m、桁行約 3.0m を測り、梁間 3 間 × 桁行 2 間以上の規模を有する。北側の史跡指定地内に続く南北方向の建物とみられる。柱筋の方位は N-9°-E である。柱穴は約 1.3m × 1.1m の長方形を呈し、深さ 0.4~0.5m を測る。全部の柱穴から最大直径約 42cm を測る柱痕を検出し、うち 4 つに柱根が遺存していた。柱根はよく残っているもので直径約 30cm を測る。礎板・根石などはみとめられなかった。埋土は暗褐色土と暗灰色または黒褐色粘土の 2 層で、暗褐色土中から土器片が少量出土している。

建物 6 は、建物 3・4 に重複して検出した。両妻の柱穴が失われているが、梁間約 4.2m (柱間 1.4m)、桁行約 7.2m (柱間 1.8m) の 3 間 × 4 間の建物とみられる。平面積は 30.2m² を測る。柱筋の方位は N-9°-E である。建物西柱筋は北側約 5.6m を隔てた建物 5 の西柱筋にはほぼ並んでいる。柱穴は 1 辺 0.7~0.9m の方形を呈し、深さ 0.3~0.4m を測る。柱穴の切り合いかから建物 3 および 4 よりも新しい。柱穴埋土は暗褐色ないし淡褐色土で、土師器細片が出土している。

建物 7 は、建物 3・4 から東へ約 11m を隔て、石組井戸のすぐ北側で検出した。3 間 × 3 間の総柱建物で、東西約 5.1m (柱間 1.7m)、南北約 5.4m (柱間 1.8m)、平面積 29.1m² を測る。柱筋の方位は N-9°-E である。東北隅の柱穴は削られているが、他は 0.6~0.7m 程度のほぼ方形を呈し、深さ 0.2~0.4m を測る。柱穴埋土は暗褐色土で土器細片が出土している。

建物 8 は、建物 5 に一部重複して検出した。柱穴の切り合いかから建物 5 より古い。3 間 × 5 間で梁間約 4.5m (柱間 1.5m)、桁行約 8.4m (柱間 1.7m)、平面積約 37.8m² の規模を有する。内部に間仕切りがある構造の建物で、南・西面に庇がつく。柱筋の方位は N-24°-W である。柱穴は 0.7m × 0.8m の開丸方形を呈し、深さ 0.1~0.3m を測る。庇の柱穴は方約 0.4m、深さ約 0.2m を測り、身舎よりも規模が小さい。身舎・庇とも、柱根・根石などは検出されなかった。埋土は暗褐色土で、埋土中からごく少量の土器片が出土している。

建物 9 は建物 8 の東側で検出した。2 間 × 4 間で梁間約 3.0m (柱間 1.5m)、桁行約 6.0m (柱間 1.5m)、平面積は約 18.0m² を測る。柱筋の方位は N-32°-W である。柱穴は 0.4m × 0.6m 程度の方形を呈し、深さ 0.1~0.3m を測る。柱穴埋土中からごく少量の土器片が出土している。

建物 10 は、建物 9 の東側で検出した。約 3 分の 1 が調査区外にあるが、2 間以上 (柱間 1.7m) × 4 間 (柱間 1.7m) の建物とみられる。柱筋の方位は N-16°-W である。柱穴は 1 辺約 0.6m のほぼ方形を呈し、深さ 0.2~0.3m を測る。柱穴埋土は暗褐色または灰褐色土。柱穴の 1 つから須恵器杯身がほぼ完形で出土したほか、埋土中から少量の土器片が出土している。

井戸(図版第 71)は、調査区南東隅で検出した。人頭大ないし小さめの川原石を用い、小口積みで構築された円形の石組のものである。上端部径約 1.15m、底部径約 0.75m を測り、現存深は約 2.0m である。中位に花崗岩の割石(大は 40 × 30cm 程度)がみられ、これより下は小

きめの石を多く用いている。掘形平面は東西約3.2m、西辺約2.8m、東辺約4.0mの隅丸台形を呈する。掘形埋土は、小礫まじり暗褐色土である。井戸内には、暗灰色粘土が底から約0.15m堆積していたが、その上部は川原石が上端まで一杯に詰まっており、石組を崩して一気に埋めたものとみられる。

遺物は、底部の暗灰色粘土上部から土師器の小型甕、上層礫土の中位から礫中に突きたった状態で建築材、上位から土器片がそれぞれ出土した。底部出土の小型甕は8世紀後半のものとみられ、押しつぶされたような状況であったから、井戸廃棄時に投入したものとも考えられる。また、掘形埋土中から土器片が出土している。

柵列はN-95°-Eの方向で柱間約1.3mを測る。3間約4mを検出したが、さらに東へ続く可能性がある。柱穴は直径0.6m前後、深さ約0.3mである。このほか、調査区南東部には奈良時代とみられる方形の柱穴が密集しており、南北方向の柵列になる可能性がある。

(3) その他

溝2は、耕地整理前の旧水路である。史跡指定地北辺の畦の方向と一致して南流してきたものが、堰跡で屈曲してほぼ真南方向に流れている。上留めの杭列を南半西側および堰付近で検出した。

遺物(図版第32~36・79~81・挿図11)

本調査区の遺物は整理箱10箱足らずで、調査面積、遺構に比してごく少ない。しかも大半が整地層出土の細片で、遺構に伴い器形の知られるものは限られている。以下、概略を記す。

(1) 住居跡・土器群出土の遺物

住居跡1出土の高杯21は椀形の杯部で、口縁端部はやや外傾する平坦面をなす。甕22は平坦な底部から直線的に体部がのびる。中央に円形、周囲に橢円形の蒸気孔を配する。

土器群出土の高杯1~3は、椀形に近い杯部に、脚柱部から裾部がゆるやかにひろがる脚部がつく。口縁部がわずかに内弯するものと直線的にのびるものがある。端部はヨコナデして丸くおさめる。胸部中位に1孔を有する。甕4は、扁平な体部に外反気味の短い口頸部がつく。外面はハケ調整後ナデ調整、内面は体部下半をヘラ削りし、口縁部はヨコナデして丸くおさめる。体部中位に径1.2cmの円形孔を斜めに穿つ。甕には口縁部が直立する小形のもの(5)と、外反する口縁部をもつ大型のもの(6)がある。甕7は下すぼまりの体部に平坦な底部がつく。底面には中央に1つ、周囲に7つの蒸気孔が穿たれており、体部中位に一对の把手がつく。口縁部はわずかに外反し、端部は外傾する平坦面をなす。外面縦方向のハケ調整、内面ヘラ削り後ナデ調整、口縁部はヨコナデ調整で仕上げている。23は中央のぶあつい底部で、横断面は隅丸方形を呈する。

(2) 建物・井戸出土の遺物

掘立柱建物柱穴から出土した土器は、大半が土師器・須恵器の細片である。器形等の知られるものは、建物10出土の須恵器杯身15のみである。15は、受け部のたちあがりがしっかりしており、端部は内傾する段をなす。底部の回転ヘラ削りは約1/2まで施されている。6世紀前半。

井戸底から出土した小型甕は、8世紀後半頃のものである。口径15cm前後を測り、ほぼ球形の体部に外反気味の口縁部がつくもの(8~10)と、長手の体部に内湾する口縁部がつくもの(11)がある。体部外面はハケ調整、内面がハケ調整もしくはハケ調整後ナデ調整を加える。口縁部は内面ハケ調整後外面をヨコナデ調整して仕上げている。8は口縁端部に1条の沈線をめぐらす。11は口縁端部が外傾する平坦面をなし内面にやや肥厚する。胎土は生駒西麓産のものに酷似する。12~14は底部。8・10・11・12はスヌまたは炭化物が付着している。井戸埋土出土の32は鍋口類部。外面は厚くスヌが付着している。須恵器は杯蓋(29・30)、長颈甕(33)、甕(28・31)などがある。33は体部上半に白釉釉がかかっている。

建築材(40~43)は、埋土中に突き立った状態で出土したため上方にあつた一端が腐朽している。いずれも端部近くに一对の切り欠きがある。比較的よく遺存している43では、一方は台形、他方は矩形を呈しているが、他の3本の切り欠きがすべて同じ形状であるかどうかは判然としない。これらは丸太材として直径10~15cmに復元でき、相互に井桁状に組み合うものとみることもできる。ずれ止めの太枘穴がみとめられないことが気にかかるが、本調査区で高床倉庫が検出されたこととあわせて、「丸木倉」の壁体と考えられないこともない。37~39は板材。

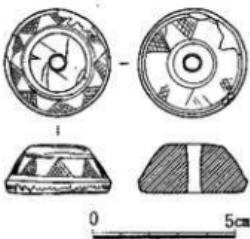
(3) 整地層出土の遺物

整地層から出土した土器は大半が6~8世紀代のものである。以下特徴的なものの概略を記す。底部24・25は、底面に棒状のものでえぐった穴が多数ある。23の同類であろうか。50~59は甕である。口縁部、焚口部、底部、底部をみとめた。杯身16は、たちあがりが短く内傾しており、端部は丸い。甕17は肩の張った半球形の体部で、肩に1条の沈線をめぐらす。沈線にかけて斜めの1孔がある。いずれも6世紀代におさまる。

瓦は2点出土した。平瓦で、60は側面をとどめ厚さ2.8cm、凸面はなでており凹面には布目压痕がのこる。側面の面取りはない。胎土は砂粒を含む。61は厚さ2.8cm、胎土精良で凸面に斜格子の叩き目、凹面はなでてあるが布目压痕がみとめられる。

土師器杯18は平底で口縁部がわずかに外反気味にひらく。皿19は口縁部が丸く内側に肥厚する。把手付鍋20は、扁平な体部に大きく外反する口縁部がつく。端部は内側に丸く肥厚している。26・27は把手。接合は貼付による。いずれも風化が激しい。須恵器44~46は杯蓋。44は内面に断面三角形のかえりがある。45は宝珠つまみ、46は、輪状のつまみがつく。47・48は杯身底部。49は臺底部とみられる。7世紀後半から8世紀後半のものである。

このほか、石鐵・紡錘車がある。柱穴埋土中から出土した石鐵(図版第31b~2)は、円基無茎式でサヌカイト製である。先端部は欠失しているが現存長2.5cm、基部幅2.7cm、厚さ0.5cmを測り、断面は菱形を呈する。重さ2.6gを測る。撫文時代のものであろう。紡錘車(同-3)は、截頭



插図11 45-J・K・N・O地区 紡錘車

円錐形で最大径3.7cm、厚さ1.6cm、重さ31.3gを測る。滑石製で側面および底面に斜格子文でうめた龜齒文が線刻されている。古墳時代後期に属する。

小 結

今回検出した遺構は、古墳時代と奈良時代に大別できる。古墳時代については、竪穴式住居跡を検出し、同時代の集落がこの地域まで広がっていたことが判明した。これまで、この時期の住居跡は史跡指定地北～西辺域に集中しており、南西域では初出である。西隣の調査区では同時期の遺構はみとめられていないので、集落の南西縁辺にあたるとかんがえられる。

奈良時代については、8棟の掘立柱建物と石組井戸を検出した。この小字高津は、藤沢・夫氏が郡庁院を設定された地域であるが、今回の調査では回廊等も検出されずむしろ否定的な結果となった。また、瓦その他の寺院関連をおもわせるような遺構・遺物がみとめられなかったことから、芥川廃寺にかかる跡物である可能性は低いとみられる。

さて検出した掘立柱建物群について、西側隣接地の総柱建物2棟とあわせてすこし検討してみたい。建物には、建物方位が磁北から大きく西に振れる一群と、やや東に振れる一群があり、いま前者をⅠ群、後者をⅡ群としておく。伴出遺物が乏しく確定できないが、鳴上郡衙跡の建物方位の年代観からしてⅠ群は7世紀後半、Ⅱ群は8世紀後半頃と推定される。石組井戸は掘形北・西辺がほぼ正方位であることや、出土遺物からみてⅡ群に伴うものとかんがえられる。

Ⅰ群には建物8～10がある。方位は磁北より32～16度西に振れており、庇付跡物を含む。一時期に併存したものかどうかは不明である。

Ⅱ群には建物1～7が該当し、磁北に対し5ないし9度東へ振れている。このうち建物5は柱間8尺ないし10尺、柱直径14寸を測り、郡庁院回廊とみられる遺構を除いて船上郡衙跡ではこれまで最大の掘立柱建物である。総柱建物1～4・7は、柱穴の規模形状等からして1～4が倉庫とかんがえられるが、7はむしろ高床の住居とみたほうがよいようにおもわれる。重複があるのですべてが同時存在ではなさそうである。

試みに柱筋の方位をとると、磁北に対して東へ5度振るもの(建物1～3)と9度振るもの(建物4～7)に分かれ。後者は重複からさらに細分でき、建物4は3の建て替えでかつ建物6に先行する。建物1～4は倉庫、5～7は住居とみられるから、建物4を介在してⅠ-A倉庫群、Ⅱ-B住居群に整理できる。重複や柱筋から、A→Bの変遷がかんがえられるが、一部両者が併存した可能性もなくはない(插図12)。

倉庫群についてみると、建物1と建物2は東柱筋を揃え南北に並ぶ。建物1の北柱筋は建物3南柱筋に揃っている。建物1・2間は約6m、建物1・3間は約12mを測り、建物3の南側および東側10mの間は空間地となっている。このことは、3棟の倉庫が中央の空間地(広場)を意識して配置されていることを示唆していく注意される。東部の柱穴群や柵列の存在は、この想定を補強する。

住居群については、建物5西柱筋と建物6西柱筋、建物6南柱筋と建物7南柱筋がそれほど揃い、最大の建物5を主屋とするまとまりのよい配置である点、注目される。おそらく

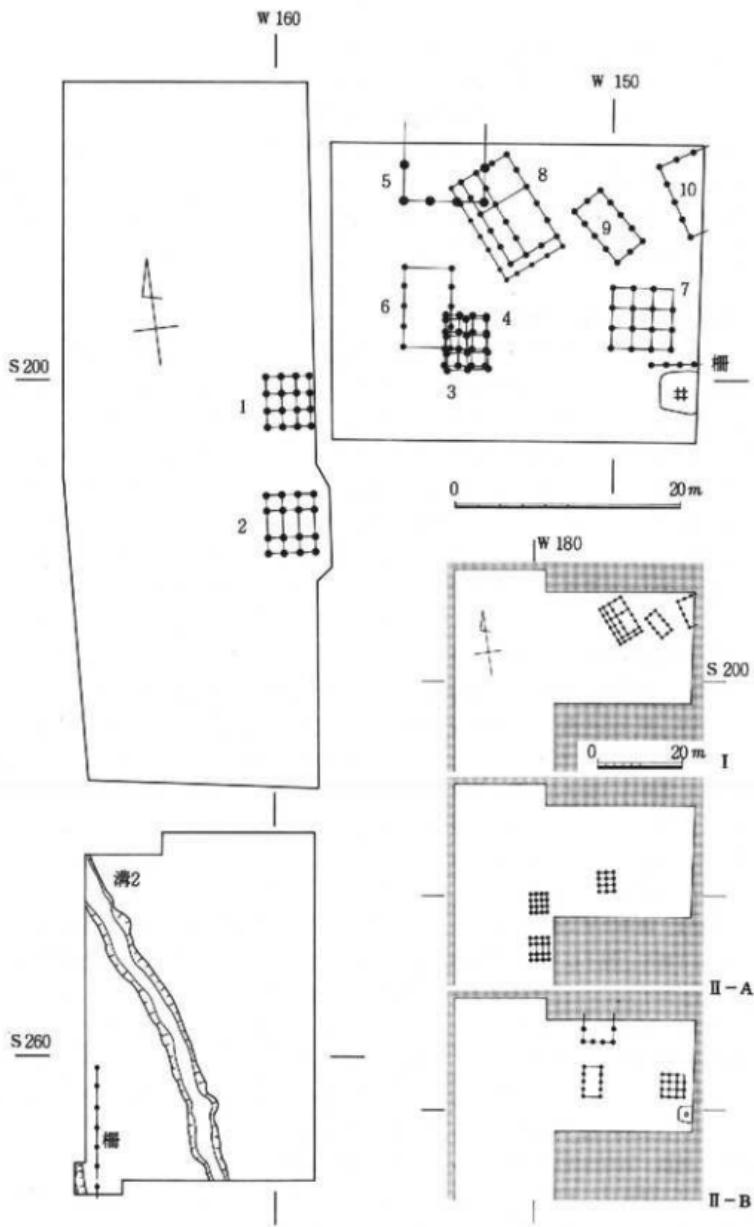


插图12 45·55地区 挖立柱建物配置図

く石組井戸はこの住居群に伴うものであろうとおもわれる。

以上掘立柱建物群を3群に分けてみたが、島上郡衙南西城では初見であり、これらの性格についてはなお検討を要する。II群の倉庫群と住居群は時期差とかんがえられるが、倉庫群は屋敷内の倉である可能性もすてきれず、今後の調査にまちたい。しかし島上郡衙および山陽道との位置関係からみて、郡衙と密接な関連があることは容易に想像される。大規模な建物や計画的配置は一般集落内の建物とはかんがえがたく、官司もしくは高級官人の居宅の一部である可能性が高いとおもわれる。(鍾ヶ江)

12. 55-A・B・E・F 地区の調査

高槻市郡家新町250番地にあたり、小字名は高津と称する。現状は水田である。このたび宅地を造成する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南側に位置し、芥川廃寺の南方約200mにあたる。調査は、周辺部の調査によって遺構の分布が希薄な地域であることが判明しているため、申請地を東側と西側に2分割し、耕土・床土・整地層の堆土を重機で反転しておこなった。基本的な層序は、耕土(0.2m)、床土(0.08m)、暗灰色粘土層(0.35m)[整地層]、黄灰色砂質土層[地山]である。地山面の標高は、北端で15.35m、南端で15.2mを測り、ほぼ水平な地形を呈している。

遺構(図版第10・16・70)

検出した遺構は、調査した面積の割に少なく、柵列1条、土壙1基、溝3条である。

柵列は、調査区の南西部で検出した南北方向の柱列である。これまで6間分が確認されているが、さらに南側の調査区域外に延びている可能性が高い。柱穴のプランは、円形・方形を呈し、大きさ、深さとも一定していない。柱間は、1.7~2.0mを測り、これも一定していない。柱筋は、磁北より東側に約5度振っている。この柵列がいつどのような性格を持って建てられたかは、今回の調査区では明らかにできなかったが、柱穴掘形・柱筋などから平安時代のものと推定することができる。

土壙は、柵列のすぐ東側で検出したもので、プランは円形を呈する。規模は径1m、深さ0.25mを測る。埋土は上層が黒褐色土層、下層が暗灰色砂質土層であり、土師器の腹片が底部より出土している。時期および性格等については明確でない。

溝1は、調査区の東端で検出した自然の流路である。流路は非常に蛇行しており、しかも何本かに枝分れして流れたらしく、東側では地山面が一部島状に残されている。河床は全体的に浅く、深さは約0.3m前後である。堆積土は暗灰色砂層、黒色粘土層、灰白色砂層のブロックが各流路に沿って認められる。遺物は全体的に少なく、河床近くから旧石器・弥生土器・土師器・須恵器片が出土している。埋没時期は6世紀の中頃である。

溝2は、調査区の北西部から南東方向に流れる南北溝である。自然の流路であるため、少し蛇行しているが、溝1に比べると直線的である。規模は幅約2.5m、深さ約0.3mを測る。

堆積土は3層に分かれており、上層が暗灰褐色土層、中層が暗灰色砂質土層、下層が暗灰色砂礫層である。出土した遺物の多くは、中層と下層の上面に接して包含されており、遺存状態は全体的に良好である。遺物は日常的に使用された須恵器・土師器が大部分であるが、水の祭祀に使用されたと考えられる土馬が1点出土している。

溝3は、調査区の南西隅で検出した南北溝である。大部分は調査区域外にあり、規模等は明確ではないが、方向性などから昨年調査した55-I・M地区の溝2に接続するものと考えられる。堆積土は3層に分けられ、上層が暗灰色砂質土層、中層が青灰色砂質土層、下層が黄灰色砂層であり、深さは約0.4mを測る。出土遺物はまったく認められなかった。

遺物(図版第37~40・82)

出土した遺物は、遺物包含層が認められないため、溝1と溝2のものに限られる。

旧石器時代の遺物は、溝1から製品と剝片が若干出土した。15・16は翼状剝片を素材とした典型的な国府型ナイフ形石器である。15は厚い剝片を素材としたためか、腹面側の稜線が背部調整によって除去されている。17は舟底形石器で、両側縁から急角度な二次調整が施されている。18は扁平な剝片を素材とした搔器である。上剥離面側から急角度で丁寧な二次調整が施されている。19は扁平な剝片を素材とした削器である。下側縁を両面側から粗い二次調整が施されている。20は原礫面をもつ、翼状剝片石核である。裏面側には特徴的な翼状剝片の剥離面が残されている。石材はサヌカイトである。

弥生時代の遺物は、溝1から少量出土した。出土した土器の多くは、後期後半に属するものが大部分であるが、24の底部は、全体的にヘラ削り調整によって、薄く仕上げられていることから、中期後半の壺の底部になる可能性が高いものである。20・21は壺の口縁部であり、21は外面に丁寧なヘラ磨き調整が施されている。25は壺の底部であり、上げ底風の底部には、粘土を補充した痕が認められる。22は高杯の杯部で、内外面とも丁寧な横ナデが施されている。25は台付鉢などの脚部で、端部を横ナデし丸くおさめている。

古墳時代の遺物は溝1と溝2から少量出土した。23は布留式壺の口縁部で、内面端部を横ナデ調整によって、少し肥厚させている。1は溝1から出土した完形の小型直口壺である。少し扁平な球形の体部に、短く外反する口縁部がついたものである。外面は全体にナデ調整によって仕上げられており、内面には粘土の接合痕が粗く残されている。

須恵器の杯身(2)は、溝1から出土した遺物の中で最も新しい時期のものである。底面は丁寧なヘラ削りが施され、口縁部内面には凹線がわずかに残されていることから、6世紀中頃の時期が考えられる。杯蓋(3・4)と杯身(5・6)は、溝2から出土したもので、3が最も古い遺物である。3は頂部に少しヘラ削り調整を施しているが、4~6はヘラ切り痕がそのまま残されており、口径も約9cmと小さく、須恵器の杯としては最も小型化した時期のものである。27・28は杯身と杯蓋が反転した後の時期のもので、27は杯蓋であるが、内面には受け部がついており、28には宝珠つまみが頂部につけられている。時期は6世紀末から7世紀中頃までのものである。

奈良時代の遺物は、溝2から古墳時代のものと一括で出土した。器種としては、須恵器で

は杯・蓋・鉢・壺蓋・長頸壺・甕が、土師器では杯・高杯・甕・羽釜・瓶・カマド・製塩七器などがある。7は須恵器の蓋である。扁平な笠形を呈し、頂部には扁平な擬宝珠つまみが付く。外面はヘラ削りがおこなわれている。8-11は須恵器の杯で、高台のつくもの(8)と高台のつかないもの(9-11)がある。底部はヘラ削り未調整(9-11)が大部分を占めているが、高台のつくものは軽くなっている。高台のつく杯は全体が丸味をもち、高台も内側の位置から外側へふんばるようにつけている。11は生焼けの製品で、黒斑を有する。12は須恵器の壺蓋であり、外面には緑色の自然釉が全体にかかる優品である。肩部には1条の凹線がめぐり、頂部には扁平な擬宝珠つまみがつくほか、大きな環状のつまみ状のものがつけられている。口縁端部は内側を少しつまみ出しており、段に近い凹面形を呈する。13・31・34は須恵器の長頸壺である。13は肩の丸い体部に、長い口頸部がつくもので、口縁部に焼きひずみが認められる。高台は八の字形に外側にふんばってつけられており、端部は内傾する凹面形を呈する。肩部には1条の凹線がめぐり、一部に自然釉の付着が認められる。土師器では完全に復元できたものはないが、日常的に使用するすべての器種がある。37-39は杯で高台のつかないもの(37・38)と高台のつくもの(39)がある。35は羽釜であり、36は大形の甕である。41は大形の瓶片で、いずれも外面は粗い刷毛調整が施されており、スヌの付着などが認められる。

今回出土した上馬は奈良時代の一般的なものと比べると、大型の優品である。残念なことに体部から下半部を欠失しており、頭部と頸部のみしか知りえない。頭部および頸部はいずれも中空であり、目は穿孔している。馬具は体部の刷毛調整がおこなわれた後、細い粘土紐を貼りつけて表現しており、鞍、手綱、面繫などが認められる。また、たてがみなどの表現も非常に丁寧におこなわれており、粘土板を貼りつけた後、ヘラを使用して細い線刻を施している。色調は酸化鉄が部分的に付着しているが、黄灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は細砂を含む良質のものである。時割は古墳時代後期から奈良時代前半の遺物と一括で出土しているため明確でないが、大型で精巧につくられることなどから、7世紀でも前半頃のものと推測される。(大船)

II. 焼山古墳群

13. 焼山古墳群の調査

高櫻市阿武野一丁目944-243番地にあたり、小字名は阿武山と称する。現状は山林である。このたび、宗教総合施設を建設する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、後期の群集墳として著名な塙原古墳群の東端にあたり、史跡・阿武山古墳の南東約900mの丘陵上である。この丘陵地は以前から病院用地として利用されていたた

めに、かなり造成工事が進められており、分布調査では古墳の墳丘などの痕跡は認められなかった。しかし、丘陵の西端部一帯からは、以前に埴輪片が採集されており、群集墳が形成されるよりも古い段階の古墳の存在が予測された。調査はまず重機を使用して、盛土・攪乱層を除去し、削平された古墳の検出作業からおこなった。

遺構・遺物(図版第41・42・挿図14)

今回検出した遺構は、調査面積の割に少なく方墳2基のみである。

方墳1は、調査区の中央部西側に位置し、墳丘の北東部を検出した。墳丘の西・南側はすでに建物の基礎等によって攪乱をうけており、規模および埋葬施設等についてはまったく明確でない。

周濠はほぼ磁北に平行して掘られており規模は幅1m、深さ0.15mを測る。埋土は暗黄色土層で、埴輪の細片を多量に包含していた。出土した埴輪は、大部分が円筒埴輪片であるが、形象埴輪片(7・8)も若干ある。いずれも細片のものばかりで、全形を知れるものはない。円筒埴輪は推定径約30cmを測り、外面には二次調整の横ハケが施されている。タガは幅1.3cm、高さ0.5cmを測り、断面は扁平なM字形を呈する。外面にはヘラ記号を認められるものがあるが、全体を知れるものはない。また、外面に黒斑を残すことから、焼成方法は窯窓が採用される以前の野焼き段階のものである。時期は明確でないが5世紀中頃の古墳と推測される。

方墳2は、方墳1のすぐ北側で検出したが、攪乱が著しくおこなわれており、東濠の一部を確認したのみである。そのため、墳丘の規模および埋葬施設等については、まったく明確でない。周濠は磁北とほぼ平行しており、幅1m、深さ約0.15mを測る。埋土は暗黄色土層で、濠中から埴輪片と石器片を若干出土した。埴輪片はいずれも細片であって、全形を知れるものはないが、円筒埴輪の他に形象埴輪片(11・12)も含まれている。円筒埴輪片の中には、須恵質を呈するもの(7・9)が認められるなど、方墳1よりも新しい時期の埴輪が樹立されていたことがわかる。

石器は、ナイフ形石器2点(16・17)と剝片数点(13-15)がある。いずれもサヌカイト製のもので、表面の風化が著しく進んでいる。ナイフ形石器は下半部を欠失しているが、いずれも翼状剝片を素材とした典型的な国府型ナイフ形石器である。

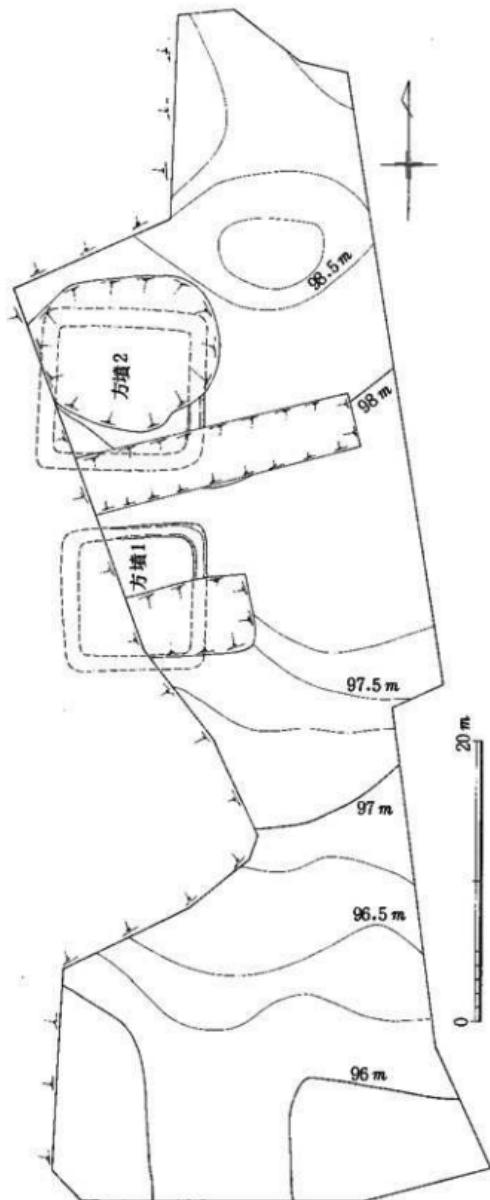
小 結

塙原古墳群は北摂地域を代表する後期の群集墳である。古墳の総数は114基を数え、阿武山の南斜面から裾部を中心に、横穴式石室を主体部とした円墳が数多く造られている。

今回の調査では、塙原古墳群より約1世紀も古い時期の方墳2基を検出したが、時代的な



挿図13 焼山古墳群の調査位置図



挿図14 焼山古墳群 平面図

違いなどから新しく「焼山古墳群」と呼ぶことにした。こうした方墳群は、市内では紅葉山古墳群、尼ヶ谷古墳群、川西古墳群、箕塚古墳群等が調査されており、2～5基を1単位として形成されている。この時期の古墳は、埋葬施設は木棺直葬であり、墳丘も全体的に低く造られていたらしく、遺存状態は他の時期に比べて全体的に悪いのが特徴である。(大船)

III 郡家今城遺跡

14. 郡家今城遺跡の調査

調査地は高槻市氷室町一丁目 781-12番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地で、このたび個人住宅の建て替えが計画されたため、工事にさきだって発掘調査を実施した。

今回の調査地は郡家今城遺跡の西端部にあたり、昭和49年に旧石器時代および奈良～平安時代の集落構造を検出した調査区の西側で、女瀬川との中間に位置する。

調査は届出地の中央に2m×2mの試掘場を設定し、人力で掘削した。層序は、盛土(0.4m)、耕土(0.2m)、黄褐色粘土〔床土〕(0.05m)、青灰色砂質粘土・一部青灰色砂礫(地山)である。遺物包含層ならびに遺構はみとめられなかった。地山面は西にゆるやかに傾斜し、標高は18.1mをはかる。青灰色砂質粘土層を掘り下げ、黄褐色砂礫まじり粘土層に至ったが、なんら遺物は出土しなかった。層序からみて西を流れる女瀬川の旧河道と考えられる。(鰐ヶ江)



挿図15 郡家今城遺跡の調査位置図

IV 富田遺跡

15. 富田遺跡の調査

高槻市富田町4丁目2517番地にあたり、小字名は市西ノ口町と称する。現状は宅地で、このたび共同住宅建設に先立ち、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。



挿図16 富田遺跡の調査位置図

今回の届出地北側では、市営住宅建設に伴う調査によって、弥生時代から中世にかけての集落跡が発見されており、その拡がりを知るうえでも重要と考えられた。しかし、土地所有者の話によれば届出地は最近まで溜池であったとのことである。

調査は届出地の南部と北部に試掘場を設けて実施した。層序は盛土(0.55m)、灰褐色土(0.2m)で地山は黄褐色砂礫である。南部の試掘場の西半分は、地山を約0.4m掘りこんだ状態で、ヘドロ状の黄灰色土が堆積していた。北部の試掘場では、盛土のすぐ下からヘドロが堆積していた。

今回の調査では溜池とその肩部が確認されただけで集落の拡がりは確認できなかった。また、遺物もまったく出土しなかった。(橋本)

V 津之江南遺跡

16. 津之江南遺跡の調査

高槻市津之江北町216-1・6、217-3・7番地にあたり小字名は垣之内、荒登と称する。

現状は用水路である。このたび、水路を改修する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

津之江南遺跡は、嶋上郡衙跡の南方約1kmに位置し、「アチャリの森」を中心に東西約400m、北は国鉄東海道本線から、南は阪急京都線までの南北約300mの範囲である。

本遺跡の調査は、昭和47年10月、高槻市立津之江小学校の建設に伴って実施したのが最初である。これまでの調査成果では、校舎地区において旧石器時代の遺構面と古墳時代の土塙墓群が確認されており、南側のフェンス地区では弥生時代後期の竪穴式住居跡3棟、歴史時代の掘



挿図17 津之江南遺跡の調査位置図

掘立柱建物群、井戸などが密集して検出されている。

今回の調査区は、津之江小学校のグランドの南端から南側の阪急京都線までの用水路であり、長さは約100mを測る。

調査はまず重機を使用して、水路の堆積土を除去し、その後人力で地山面まで掘り下げておこなった。調査区の基本的な層序は、耕土(0.6m)、暗灰色土層(0.4m)【整地層】、茶褐色砂質土層【地山】であり、遺物包含層は今回の調査区では認められなかった。地山面のレベルは、北端で10.6m、南端で10.2mを測り、南側にゆるやかに傾斜する地形となっている。

遺構(図版第43・44・72)

今回の調査では、調査面積が狭小であったにもかかわらず、弥生時代から中世に至る各種の遺構をほぼ全域から検出した。

壺棺は、弥生時代前期の大型の壺を利用したもので、直径0.8m、深さ0.2mの土壤中に下腹部を下にして置かれていた。棺自体はすでに上半部が後世の削平によって失われていたが、土壤内の下半部は良好に遺存していた。腹部には壺棺特有の穿孔が数ヶ所で認められ、棺内からは拳大の石にまじって、蓋に使用されたと考えられる深鉢片が出土した。

住居跡1は、調査区の中央部北側で検出した方形のプランを有するもので、西側の大部分は調査区域外にある。この住居跡では3回程の建て替えがおこなわれており、南側に少し拡張して造り変えている。住居跡の南北辺は磁北に対して32度程西側に振っている。壁面の高さは北・南側とも0.1mを測り、周溝は0.1~0.25m、深さ0.05~0.1mである。住居跡の埋土は暗褐色粘質土層で、弥生時代後期の土器片を若干出土した。また、北・南側の周溝は古墳時代の土壤によって攪乱をうけている。

住居跡2は、住居跡1のすぐ北側で検出した円形のプランを有するもので、西・東側の大部分は調査区域外にある。住居跡の規模等は明確でないが、検出した部分から推測すると、径約9m程の円形を呈していたと考えられる。壁面の高さは、北・南側とも0.2mを測り、周溝は幅0.2~0.3m、深さ0.15m前後を測る。住居内の北壁に接した柱穴は、他の柱穴と比べて大きく、底部から完形の小型壺・小型鉢を出土したことなどから、貯蔵穴であった可能性が高い。また、住居跡の埋土中からは、多数の弥生土器・須恵器片にまじって、完形品の甕が2個体(5・6)出土した。出土遺物は、弥生時代から古墳時代のものも含まれているが、大部分は弥生時代後期後半のものである。

井戸1は、調査区の南側で検出した井戸枠を有するものである。井戸の掘形は、2段になっており、上段は東西約2.5m、南北3.2m、深さ0.5mを測る。下段は中央部に掘られ、径1.2m、深さ0.7mの円形である。井戸枠は曲物と板囲いを組み合わせたもので、下部の4段が残存する。下枠2段は径40cm、曲物で、3段目が一辺60cmの板囲いである。4段目は大型の曲物であるが、残存状態が悪く法量は明確でない。井戸の掘形内には、幅0.2m、長さ2.4mの板材が埋められていた。この井戸からは、中世の瓦器椀・土師器皿が出土し、廃絶した時期は12世紀頃と考えられる。

井戸2は、調査区の北側で検出した円形の素掘りのもので、直径1.2m、底径0.7m、深さ

0.6mを測る。埋上は暗褐色土層であり、弥生土器と土師器片を少量出土した。時期は古墳時代前期のものである。

溝1は、調査区の中央部南寄りで検出した東西溝で、幅1.1m、深さ0.1mを測る。埋土は黒色土層で、弥生土器・須恵器片を若干出土した。時期は古墳時代のものである。

溝2は、調査区の中央部で検出した東西溝で、幅1.8m、深さ0.5mを測る。埋土は黒色土層で、一端が腐蝕した柱材を6点と瓦器碗・土師器皿を検出した。時期は11世紀末頃である。

溝3は、調査区の中央部で検出した東西溝で、溝4に接続している。規模は幅0.9m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰色粘質土層で、出土遺物は認められなかった。

溝4は、調査区の中央部で検出した直角に南側に曲がる溝で、幅0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色土層で、出土遺物は認められなかった。

土壤1と2は、住居跡1の南側で検出したもので、西側がいずれも調査区域外にある。深さは両者とも約0.5mを測り、弥生土器・土師器・須恵器片を少量出土した。

土壤3は、溝3のすぐ北側で検出したもので、プランは卵形を呈する。規模は短径1m、長径1.5m、深さ0.5mを測る。埋土は暗褐色土層で、出土遺物は認められなかった。

土壤4は、溝5の北側で検出したもので、プランは不整形を呈する。規模は短径約1m、長径1.8m、深さ0.15mを測る。埋土は黒色土層で、出土遺物は認められなかった。

土壤5は、井戸2のすぐ南側で検出したもので、プランは卵形を呈する。規模は短径1m、長径1.3m、深さ0.4mを測る。埋土は暗茶褐色土層で、出土遺物は認められなかった。

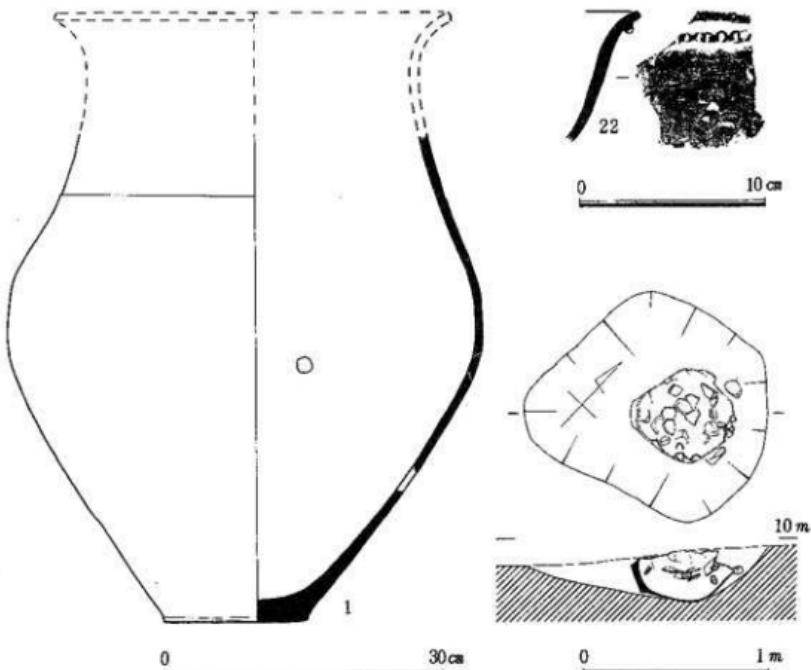
土壤6は、溝1のすぐ南側で検出したもので、プランは不定形を呈する。規模は短径1.2m、長径1.6m、深さ0.4mを測る。埋土は黒色土層で、弥生土器片を少量出土した。時期は弥生時代後期後半のものである。

落ち込みは、住居跡の南側で検出した不定形なもので、東・西側とも調査区域外に拡がっている。深さは約0.3mを測り、埋土は暗褐色土層である。出土遺物は、多量の弥生土器・土師器・須恵器片があるほか、磁石2点も検出されている。

遺物(図版第45~48・83・挿図18)

弥生時代の遺物は、前期の壺棺をはじめ、住居跡・落ち込み等から出土した多量の土器がある。

上器棺墓に用いられたものは、畿内第I様式土器の壺(1)と鉢(21~23)である。棺本体となる壺は頸部中位以上が失われている。底部は平板な平底で、器体の大きさに比べればさほど厚くない。底裏には、穀粒痕や切妻痕に混じって、一部に布痕のようなものもみられる。胴部は縦長の球形で、やや上方に最大腹径がある。また頸洞門には、上部をヘラ押さえすることによってつくられた段がみられる。胴部外面の調整は下半部が縦方向、上半部が横方向のヘラ磨きで、頸部下半についても横方向のヘラ磨きで仕上げている。内面は全体をナデ調整している。胎土は砂粒を多く含んでおり、色調は淡茶褐色を呈している。なお洞部には径2cm前後の穿孔が4ヶ所みられるが、うちひとつは内面からあけられたものである。さらに外からあけられた1孔については、土器棺内部からその剝片が出土していて、埋置直前に穿



挿図18 津之江南遺跡 壺棺

孔されたことがかんがえられる。土器棺の埋葬状況や土器の遺存状態からみて、埋葬時にはすでに口縁部は打ち割っていたものとかんがえられる。そしてこの土器棺の蓋に使用されていた鉢は底部を欠いていて、体部上半の一部が遺存していた。半球形の体部に外反する口縁部がつくもので、端部は面をもっている。口縁部の直下には、刻目文をほどこした突帯を貼り付けている。刻目はヘラでつけられているが、なかには布巻棒でなされたところもみられる。外面は口縁部ちかくを横方向にヘラ削り気味に調整したのち、全体をナデ調整している。内面は横方向のヘラ磨きによって仕上げている。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡灰色ないし淡灰褐色を呈している。土器棺の時期としては、壺の器形・形骸化した段のかけかた・鉢の貼り付け突帯文からみると、第Ⅰ様式新段階の前半が妥当とおもわれる。ところで本資料は、弥生時代の土器棺墓としては高槻市内の弥生遺跡中最古のものであり、刻目をもつ貼り付け突帯文を付した前期の鉢もめずらしい。と同時に、津之江南遺跡が前期にはじまるることを実証する資料としても貴重なものである。

その他の弥生土器としては、住居跡1から出土した畿内第Ⅴ様式の一群(2~6・24~33)がある。2は小型の無頸壺で、小さな平底に胴の張った体部を有し、口縁部はわずかにたち

あがっている。口縁部には2孔一対の小孔が穿たれている。概して厚手で、外面は丁寧にナデ調整し、口縁部ちかくはヨコナデしている。3は小型の鉢で、半球形の体部に中くぼみの半底を有する。口縁部は丸くおわっている。内外面ともナデ調整であるが、外面上半部の調整は粗い。4は高杯で、脚部を欠損している。内窓気味に大きくひらく杯底部と外反する口縁部からなり、屈曲部内面に稜はない。内外面ともヘラミガキするが、風化が激しく、遺存状態はよくない。5は甕で、2段階成形の体部に立ちあがりの強い口縁部がつく。体部下半はナデ調整で、上半はタタキ成形である。底部は器体に比して厚く、重量感がある。6は受け口状口縁の甕で、体部下半に激しく火熱をうけたあとがみられる。体部は3段階成形で、外面は全体を刷毛調整、内面は下半のみ刷毛調整で、上半はナデである。24は広口甕の口縁部片で、垂下した外端面に円形浮文を貼り付けている。牛駒西麓甕。25は甕の口縁部片で、端部がわずかに下方に突出している。外面は刷毛調整後ナデ、内面はヘラミガキしている。26は受け口状口縁を有する近江系の甕で、体部上半に櫛描直線文と列点文、同じく口縁部外端面にも列点文をほどこしている。27も受け口状口縁を有する甕であるが、口縁部の刻目列点文は刷毛目原体によっている。28も甕で口縁端部の上方をわずかに突出させたもので、端面はヨコナデしている。体部を含めて文様は施されていない。29は刷毛調整された甕片で、薄手のものである。口縁端部は下方へ若干肥厚している。30は近江系甕の体部片で、粗い刷毛調整後、櫛描による直線文と波状文を施している。31は有孔鉢の底部で、4孔が穿たれている。内外面ともナデ調整。32は甕の底部片で、外面にタタキメ、内面にクモの巣状痕がみられる。33は甕の底部片で、底裏にヘラによるX印が刻まれている。なお当該土器群には、このほかにもたくさんの土器片が出土しており、把手付大型鉢・器台・手焙り形土器などの器種も含まれている。おそらく住居廃棄後に一括投棄されたものであろう。時期的には第V様式後半の新相になる。

古墳時代の遺物は、土壤・落ち込み等から土師器・須恵器片が出土したが、弥生土器の出土量に比べると非常に少ないものである。また、完形に復元できたものに須恵器の蓋杯が5点ある。7は口縁部と体部の稜線が鋭利で、頂部のヘラ削り調整も稜線上まで丁寧におこなわれている。8は稜線の鋭利さを欠くが、頂部のヘラ削り調整は丁寧におこなわれている。9は稜線が退化して凹線が入るもので、ヘラ削り調整は少し粗くなっている。頂部には11の杯身と同じヘラ記号が画かれている。10は受部が水平な杯身であり、底部は深くて丸い。11はたちあがりが内傾して低く、受部はほぼ水平で、底部は浅く平らである。12は無蓋高杯で、口縁部と底部との境界に鋭い稜線を残している。その他、須恵器の器種としては、有蓋高杯(36)、小型短頸甕(42)、直口甕(43)、器台(45)がある。その他の遺物として、師楽式土器(47)も数点出土している。古墳時代の遺物の時期としては、ほぼ全ての時期のものが認められるが、中心的なものは5世紀代のものが多い。また、その他の遺物として砥石が2点ある。20は粘板岩製のもので、4面に使用痕が残る。61は黄色砂岩製のもので、5面に使用痕が残り、上端部で破損している。

中世の遺物は、井戸1、溝2から瓦器碗を中心に土師器・須恵器・磁器片が少量出土した。

13~15は井戸1から出土した土師器小皿で、いずれも口縁部を横ナデ調整している。胎土は精良で、砂粒を少量含む。16・17は井戸1から出土した瓦器碗で、口縁内部に沈線をめぐらしている。暗文は細いものを、内面に丁寧に施し、外面は上半部に施している。18・19は溝2から出土した瓦器碗で、井戸1より少し古いものである。口縁内部には同じように沈線をめぐらしている。暗文は太いものを、内面に丁寧に施し、外面は底部近くまで施している。その他、井戸1からは須恵器甕(48~51)、陶器甕(52)、須恵器鉢(53)、白磁碗(54)、瓦器小皿(60)等が出土している。時期は溝2出土の瓦器が11世紀末頃のものと推測され、井戸1はそれより少し新しく、12世紀前半頃のものであろう。

小 結

今回の調査は、水路改修に伴う小規模なものであったが、ほぼ全域から各時代の各種の貴重な遺構を検出した。特に、調査区の南側から検出した弥生時代前期の壺棺は、高槻市内の弥生遺跡中最古のものであり、本遺跡の弥生時代のはじまりは、三島地方において最も古い段階であったことが判明した。次に、弥生時代後期の堅穴式住居群であるが、今回の調査区でも2棟検出され、小学校用地の南側一帯から南側の阪急京都線まで、相当広い範囲にわたって拡がっていることが予測された。また、古墳時代から中世に至る住居地域も、検出された遺構・遺物によって、弥生時代の住居地域と重複するように分布していることが確かめられたことは、今回の重要な成果の一つである。

津之江南遺跡は、昭和47年の学校建設に伴って調査を実施して以来、これまで本格的な調査がおこなわれておらず、遺跡の開始時期および各時代の遺跡の広がりなどについては、多くの問題が残されていた。

今回の調査では、弥生時代前期から中世に至る大規模な複合遺跡であることが確認され、安満遺跡や島上郡衙跡と同じように拠点的な集落であったことが考えられる。(大船)

VII 安満遺跡

17. 北9地区の調査

高垣町 299-1番地他にあたり、小字名は御所ノ内と称する。現状は水田である。このたび資材置場を造成する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。調査は遺構が密に分布すると考えられるため、東西に2分し、耕土を反転しておこなった。基本的な層序は、耕土(0.1m)、淡黄褐色土層(0.15m)、茶褐色土層〔遺物包含層〕(0.2m)、黄褐色土層〔地山〕である。地山の西半分は暗灰色疊層となっている。現地表面の標高は12.1m、調査面積は約3000m²を測る。

遺構(図版第49~51・73・74)



挿図19 安満遺跡の調査位置図

検出した遺構は、柱穴多数、井戸4基、土壙3基、自然流路5条である。柱穴は調査区北端付近に集中して検出した。多くは径0.2m前後、深さ0.15m程度で円形を呈する。中世のものとおもわれるが、建物としてまとめることはできなかった。

井戸1は調査区東端部で検出した。円形で直径1.2m、深さ0.9mを測る。素掘りである。布留式土器とともに製塙土器が出土した。

井戸2は柱穴群の南側で検出した。方形の木組み井戸である。掘方は1辺1.4m、深さ0.9mを測る方形である。井戸枠は、0.15~0.17m角、長さ0.8mの材で内法1辺0.8m、高さ0.5mの枠を組み、幅0.4m、厚さ0.02m、長さ1m以上

上の板をたてかけ、各板の境は小ぶりの板で目かくしをしている。さらにコーナーでは、北東・北西部にやや弯曲した板を、南東部にはタケをあてがっている。掘方と井戸枠の位置関係等から西側より組みあげているとみられる。土師器小皿・瓦器椀等が出土したが、いずれも小片である。中世中頃であろう。

井戸3は円形の素掘り。径1.3m、深さ0.8mを測る。13世紀代の瓦器片が出土。

井戸4は調査区中央部で検出した。円形の素掘りで掘方径は肩部で2.4m、底部で1.6mを測り、底部は一段深く掘りこむ。深さ1.6m。土師器・東播系須恵器・瓦器・備前が出土した。中世後半。

土壙2は0.8m×1.3mの長円形。深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色土で、弥生土器が出土した。弥生時代中期前半である。

自然流路1は調査区東半、2~5は西半で検出した。地形からみて、南流している。自然流路4は幅4~5m、深さ0.3~0.8mを測る。6世紀中頃~8世紀後半の土師器・須恵器が出土した。地山の状態をみるために自然流路4~5間にトレンチを設定した。暗灰色~黄褐色疊が1mの厚さで堆積し、その下は黒灰色粘土[基盤層]となる。中期前半の弥生土器、6世紀中頃の須恵器が出土した。

調査区西半部は、弥生時代中期前半~6世紀中頃に二次的に堆積した疊が地山となっている。その後6世紀中頃~8世紀後半の間に漸次流路が形成・埋没したのである。

遺物(図版第52~57・84・挿図20)

本調査区では、弥生時代~中世に至る遺構・包含層より土器を中心とする遺物が出土している。各時代ごとに特徴的なものを述べる。

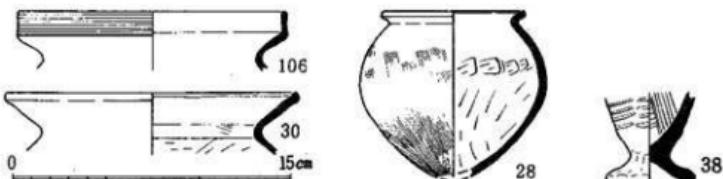
弥生時代の遺物は、柱穴埋土、土壙2・3、自然流路、トレンチ、包含層から出土した。壺・高杯・器台・有孔鉢・甕などがあり、第Ⅱ様式期のものが比較的多い。いずれも破片で

あり、完形に復元できたものはない。73は今回出土したなかで唯一の第Ⅰ様式新段階の壺である。5条の沈線をほどこす。包含層から出土した。57は第Ⅱ様式の壺である。頸部はわずかにそばまり、内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整。23・24・56・60・79・88は木葉痕の認められる底部片である。24・60は他と比べ趣を異にする。松葉かもしれない。68~72・74・75は調査区セクション東南隅で検出した。包含層の落ちこみ部分に一括投棄したようである。68は壺の口縁部で、内外面に各2条の櫛描波状文をほどこす。75は器台。口縁部は胴部から屈曲して外反する。端部には1条の凹線。胴部との境は縦方向のヘラミガキ。いざれも第V様式新段階である。刺片は2点出土した。61は土壤2出土の閃綠岩である。平滑ぎみの凹面(自然面)が認められるが、使用痕は看取できない。打ち欠いていることから石斧製作時の刺片であろう。102は金山産のサヌカイトである。包含層からの出土である。

古墳時代の遺物はおもに井戸1、自然流路4から出土した。28は小型の壺で、内面ヘラケズリ、外面は縦方向のハケで調整する。よく精製した胎土である。淡赤灰色。30は布留式最古相の壺である。106は酒津式土器である。頸部からゆるやかに外反し、やや内傾ぎみにたちあがる口縁部外面に1条の櫛描直線文をほどこす。色調は暗褐色を呈する。38は製塙土器の底部片である。体部内面はハケ、外面はタタキで整形する。脚部は低く、体部との接合部分は指で押圧ぎみにならげ。胎土には細砂を含む。古墳時代前期、大阪湾周辺の出土例は多いが、高槻市では初見である。須恵器は自然流路4出土のものが大部分である。蓋杯1・2・4~6・104・105は完形で出土した。杯蓋(1・2・65)は丸味をおびた天井部を有し、天井部と口縁部の境は不明瞭である。杯身(4~6・63・64・104・105)は丸味をおびた底部に内傾した短いたちあがりをもつ。超(8)はやや肩のはった球形の体部にラッパ状に外反する頸部がつく。口縁部を欠く。他に高杯(67)、提瓶(10)、壺(62)が出土した。6世紀中頃~後半である。66は自然流路4出土の骨片である。牛かもしれない。

白鳳~奈良時代の遺物は少ない。土師器杯(11)、須恵器蓋杯(3・7)が自然流路4、包含層から出土したのみである。

平安時代以降の土器は、井戸2~4、包含層から出土した。96は黒色土器B類の椀である。口縁端部内面に1条の沈線をほどこす。土師器小皿は、口縁部が2段に屈曲し端部が肥厚する口径10cm前後のもの(45・50・94)と、斜め上方にゆるやかにのび、口径8cm前後を測るもの(44・49)に分類できる。器形・調整等から、前者は11世紀後半、後者は13世紀頃であろう。



插図20 安満遺跡北9地区 出土遺物 包含層(106), 井戸1(28・30・38)

瓦器焼（39・40・43・47・48・96・97・99・101）は外面の暗文が省略され、内面も省略ぎみである。13世紀頃であろう。他の遺物として東播系須恵器（52・93）、備前鉢（54）、瀬戸鉢（91）、青磁碗（92）があげられる。井戸枠は東南隅部にタケを用いているほかは、スギ・マツを使用しているようである。板材には⑩や⑪などの刻印が認められるものがある。小口にノコギリで切断した痕跡が看取できる材も少なくない。建築廃材を転用し、井戸枠として用いたのである。（宮崎）

18. 10地区の調査

高槻市高垣町260番地にあたり、小字名は高垣である。安満遺跡の東部に位置し、周辺部の調査ではこれまでに弥生時代の方形周溝墓群をはじめ、奈良時代から鎌倉時代にかけての集落が検出されている。現状は水田で、このたび、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

遺構(図版第58~60・75・76)

これまでの周辺部の調査では桧尾川の氾濫による砂礫が複雑に堆積し、地点によっては、遺構が削られている場合がしばしばあった。当調査区も地山上には砂礫が堆積していたが、遺構はほとんど削られていなかった。

基本的な層序は、耕土（0.1~0.2m）、黄灰色土（0.2~0.3m）、灰色土（0.2m）、褐色土（0.2~0.3m）、灰褐色色砂礫（0.3m）、青灰色粘土（0.1m）と堆積し、地山は黄褐色砂質土である。検出された遺構は、掘立柱建物・井戸・溝がある。

掘立柱建物は2棟検出された。

建物1は桁行3間（4.8m）×梁間2間（3.4m）、方向はN-14°-Wである。

建物2は桁行1間（3m）×梁間1間（3m）、方向はN-43°-Wである。建物1の付近は地山に若干の凹凸があるため、柱穴が未確認の部分があり、梁間の柱間が崩壊しているが、掘方等からみて建物と考えた。時期はいずれも奈良時代である。

井戸は3基検出され、弥生時代後期2基と奈良時代1基である。

井戸1は円形・素掘りで、上面の長径1.8m、短径1.6mでやや東西方向に長手である。深さは2.6m、底部は長径0.8m、短径0.6mである。上面から約1.5mまでは、掘方の壁は底部にむけてほぼ直線的に確認できたが、それ以下は袋状に壁が抉れていた。底部近くの埋土には地山に混じる青灰色砂礫がかなり含まれていたため、掘方の壁が崩壊したため廃棄されたものとみられる。底部では完形の壺2点が出土した。また、上面より約1.2mの地点でも壺が1点検出された。この壺は底部近くを穿孔し、口縁部を欠いている。炭や木片も周囲から投棄されたような状況で検出されているので、井戸廃棄時の祭祀的行為を示すものかもしれない。時期は弥生時代後期である。

井戸2は奈良時代の方形井戸で、一辺2.5m、深さ1mを測る。掘方は擂鉢状で、底部を一辺0.9m、深さ0.2m程掘り下げており、木枠をこの部分にえたものとみられる。埋土は3層に大別でき、上の2層から奈良時代の土器が出土し、最下層からはまったく遺物は出土し

なかった。埋土に木くずや木の葉なども混じっており、井戸廃棄後、ゴミ棄て穴とされたものであろう。

井戸3は、直径1m、深さ1mの円形素掘り井戸で、底部は直径0.5mを測る。埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

溝は3本検出された。

溝1は幅2~3m、深さ0.5mを計り、ほぼ東西方向に掘削されている。溝内には、調査区全体をおおう灰褐色や黄褐色の砂礫が堆積している。溝内に堆積した砂礫の状態から、桧尾川の氾濫によって一気に埋まったようであるが、時期は確定できない。ただ、砂礫にまじって、弥生時代後期や奈良時代の土器が若干出土しているので、奈良時代に掘削された可能性がある。

溝2は幅0.4~1m、深さ0.1~0.2mで、調査区西北部で屈折し、溝1と重なる。検出状況からみて、溝1より古いものとみられるが、時期は確定できない。

溝3も溝2と同規模で、やはり時期は確定できない。

遺物(図版第61~63・85・86)

各井戸と褐色土・灰褐色砂礫から出土したものについて概要を記していく。

井戸1から出土した遺物は、底部と上面から1.2mの深さ(上層とする)で出土したものに大別できる。底部から出土した完形の壺2点は、いずれも弥生第V様式のものである。頸部の長さが若干ちがうが、最大腹径が体部のやや下位にあり、そろばん珠の形をした体部で、頸部からまっすぐに口縁部へとつづく。最大腹径付近には、体部下位と体部上位をつなぐ粘土の痕跡があり、1では底部と体部下位をつなぐ粘土の痕跡も明瞭で、外面に粗い刷毛目を施しているため、叩き目は底部付近に若干みられるだけである。2は外面に粗いヘラ磨きを施しているが、叩き目は明瞭である。また、内面も底部から放射状にヘラ磨きをしている。上層から出土した壺(3)は底部近くを穿孔し、口縁部を意識的に欠いている。体部は球形にちかく、全面をヘラ磨きしている。頸部に刻み目を入れた凸帯を貼り付け、凸帯の下位にもヘラ先で刻み目をつけた部分がある。胎土は粗く、小石を混じえている。上層からは、外面に叩き目の顕著な鉢(4)も出土している。

井戸2からは、奈良時代の土師器・須恵器・製塙土器が出土している。

土師器杯には、底部未調整で内面と口縁部をなでて仕上げるもの(11~13)と底部をヘラ削り調整し、口縁内面に暗文を施すもの(14)がある。土師器甕は堅く焼き締まり、明褐色のもの(16)と、やや軟質で淡褐色のもの(17)がある。前者は球形、後者はやや長手の体部である。いずれも外面に縱方向の刷毛目調整がみられ、内面には同心円状の叩き痕がみられる。

須恵器には端部の屈曲しない蓋(7)や底部に火だすきのある皿(8)、高杯(10)、有高台の杯(9)が出土している。製塙土器(21~25)はいわゆる粗製砕弾形といわれるもので胎土には砂粒が含まれている。胎土は淡黄褐色のものと、淡褐色のものがあり、後者の内面には細かい布目痕がある。他に管状の土錘(20)が1点出土している。

井戸3からは、底部を穿孔した鉢(5)が出土している。外面に叩き目が、内面に刷毛目痕

が顕著にのこっている。

褐色土から出土した古墳時代の須恵器壺(18)は、頸部に凹線と柳描波状文、体部にも凹線と柳描簾状文を施している。古墳時代に属す粗製で薄手の製塙土器(19)が出土している。赤褐色の胎土で、筒形の器形である。奈良時代の製塙土器(26~35)も出土しているが、井戸2で出土したものと同じである。須恵器の椀(6)は奈良時代中期に出現するものと考えられている。

小 結

今回の調査では弥生時代後期と奈良時代の遺構が検出された。これまでの調査でも弥生時代後期以降、桧尾川氾濫原の当調査区周辺が開発され、集落が営まれるようになったことが想像されていた。今回の調査で検出された井戸は、これまでに判明している弥生時代後期の遺構でも最も南に位置しており、集落の拡がりを知るうえで重要である。

また、奈良時代の集落の拡がりも確認できたが、井戸2から出土した遺物からみて、奈良時代中期が中心とみられる。製塙土器は、これまでの調査で検出されている井戸から出土しているものと同じで、奈良時代のどの井戸からも出土することがわかる。井戸の祭祀に関連して使用されたのか、日常に使用されたものが廃棄されたのか判らないが、製塙土器の分布が特定の集落や官衙にとどまらず、一般的に出土するものと考えられる。(橋本)

19. 22地区の調査

高槻市八丁畠町 326-17番地にあたり、小字名は才田と称する。現状は道路である。現地表面の標高は約10mを測り、北から南へゆるやかに傾斜している。

今回の届出は下水道整備工事に伴うものであり、調査地は安満遺跡の北西縁辺部付近にある。周辺では弥生時代~古墳時代の遺構が検出されている。調査は、下水管推進工区についてマンホール部分(A~Cトレンチ)を、開削工区(Dトレンチ)については、掘削部分全面について実施し、遺構・遺物の検出に努めた。



各トレンチの基本層序は、盛土(0.6~1m)、旧耕土(0.2m)、床土(0.1m)、灰褐色~青灰色粘質土層(0.3m)、灰褐色粘土層【地山】である。地山以下は、暗灰色砂と青灰色粘土の互層が続く。遺構は全く検出できず、遺物包含層も確認されなかった。遺物はDトレンチ床土より古墳時代の土師器片1点が出土したのみである。

当該地付近は、北から南へのびる浅い谷地形であったために、遺構が形成されなかつたと考えられる。(宮崎)

插図21 安満遺跡の調査位置図

ま　と　め

今年度は島上郡衙跡の調査を12箇所実施した。その多くは島上郡衙南西部にあたり、これまで遺構の分布状況が明らかでなかった当該地域について新しい知見を得ることができた。また新規郡庁院に推定している37地区で史跡現状変更に伴う調査を実施したほか、郡衙北～西辺地域において重要な資料を蓄積したといえる。一方周辺地域の調査においても大きな進展があった。以下、主なものについて要点を記し、まとめにかえる。

島上郡衙北辺部にあたる17-F・G・J地区では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居跡8棟ほかを検出し、一帯がこの時期の大集落であったことをあらためて裏付けた。これで阿久刀神社周辺の竪穴式住居跡は80棟を超えた。出土遺物については、その大要をすでに概要10で報告しているので参考されたい。今回報告したなかでは、住居跡7の炉跡から出土した帆型土器が目をひく。おもに山陰地方に分布し、畿内では豊中市利倉西遺跡につぐ出土例である。また出土状況もなんらかの祭祀をおもわせるもので興味ぶかい。

現状変更にともなう37地区的調査では、郡庁院関係の遺構検出が期待されたが、調査区が狭小なためもあって具体的に建物を復元するには至っていない。しかし調査区中央部で検出した溝1や大規模な柱穴は、今後郡庁院の規模範囲等を検討するうえで重要な資料といえる。また丘陵部と低位段丘の変換点にあたる5-M・N地区では、竪穴式住居跡と掘立柱建物が重複した遺構を検出した。調査区全面が柱穴といつても過言でなく、また船津が出土していることは芥川庵寺造営・修築にかかる工人集団の去就ともかかわって今後の課題となろう。

島上郡衙跡南西域では今年度7件の調査を実施した。なかでも芥川庵寺と山陽道にはさまれた45地区(小字高津)では、奈良時代の計画的な配置がうかがえる倉庫群やこれまで確認したなかで最大の掘立柱建物を検出し、新たな官衙城が存在することが明らかとなった。また23・33・54地区(小字林田)の調査では、芥川庵寺およびその西方の古墳時代～奈良時代集落の南縁を一定限定する資料を得た。位置関係については挿図22(概要9・島上郡衙新規郡庁院推定復元図にO～T区を加筆)を参照されたい。

高津南部にあたる55地区では、これまで山陽道が確認されたほか、これとほぼ平行する東西溝が検出されている(J区北端)。時期は8世紀中頃と推定され、O区の南北溝とつながるものとみられる。O区北端付近では橋状遺構が検出されており、南北溝はほぼ現在の高津・林田の境界にあたる。これまでJ・O区の溝はなんらかの区画施設とかんがえられてきたが、今回その両側を調査した結果、外側(西側P区)は無遺構地域、内側(北東側R～T区)には掘立柱建物群が存在することが判明したので、島上郡衙南西部の官衙を区画する溝とみてよいであろう。また検出した自然流路は、奈良時代後半には埋まっていたものと推定されるが、T区南西部の南北溝に沿う構造は自然流路近くでおわっているから、J区東西溝・O区南北溝が掘られた段階でなお谷地形としてのこり、自然的境界であった可能性もある。

さて、区画内側にあたる45地区で検出された3棟の倉庫は、柱筋を揃え中央に空間地を意識して配置されたとみられる。柱筋方位は8世紀中頃以降の新規郡庁院のそれとほぼ一致し、

この時期の嶋上郡衙では前例のない規模・配置のものである。また、同地区で推定郡庁院向廊と同規模の柱間・柱穴を有する側柱建物が検出されたことは、予期せぬ驚きであった。全容は明らかでないが、梁間3間(柱間8尺)で桁行は5間以上(柱間10尺)とかんがえられる。柱筋方位からすれば新期でも後出で、柱筋の揃う側柱建物・石組井戸と一体のものとみられる。これらは井戸をともなうことから側柱の倉庫群とはかんがえにくく、館あるいは居宅的性格をうかがわせるものである。

現段階では、これらの建物群をどう把えるか、その位置づけについては不明といわざるをえない。周囲を溝で区画され整然と並ぶ倉庫群は、山陽道に近い地理的条件からも正倅院をおもわせるところがある反面、井戸をともなう近接した時期の側柱建物群は、総柱倉庫群をも含めて郡司など高級官人の「宅」を連想させるものでもあり、判然としない。また礎石建の検出を期待しがたい遺跡の状況であるため、9世紀以後放棄されたのか建て替えがあったのかも判断できない。いずれにしても、嶋上郡衙の構成・占地とかかわる問題である。詳細な検討は後日に期すべく、そのためにも今後この地域は慎重な取り扱いが必要となろう。

なお今年度もナイフ形石器や剣片、有舌尖頭器(45-I・J・M・N地区)などの出土をみた。二次堆積物からの出土であるが、段丘上一帯を生活圏としていたことの証左である。とくに有舌尖頭器は、近畿地方では数少ない黒灰色半透明のチャートを素材とした優品である。方55-A・B・E・F地区の溝2から出土した土馬も、類例のないものである。大型中空、細部のつくりも丁寧なもので、写実的な表現は出土例のなかでは群を抜いている。ともに出土している須恵器の壺蓋もまたこれまで嶋上郡衙周辺の調査ではみられなかった優品で、芥川庵寺あるいは官衙にかかるものであろうか。

つぎに、今回新たに設定した焼山古墳群では、5世紀代の方墳2基を検出した。木棺直葬の小規模な方墳で、墳丘盛土も低く遺存状態はよくない。市内では同時期のものに紅葉山古墳群・尼ヶ谷古墳群・川西古墳群・狐塚古墳群がある。前方後円墳と併行して営まれたこれら方墳群は、後期の群集墳の前身にあたるわけで、群構成のありかた、同時期の前方後円墳とのかかわり、集落や後期群集墳との対応関係など今後の重要な課題である。

津之江南遺跡では、はじめて弥生時代前期の土器棺墓を検出し、この遺跡の成立が前期にさかのぼることを確認できた。棺に用いられている壺は畿内第I様式新段階でも前半とみられ、三島地方でも最も早い時期に属する。市域では、ほかに安満・高櫻城下層・大蔵司・芝生・郡家川西など8遺跡で前期の土器が出土しているが、明確な造構がみとめられるのは安満遺跡のみであり、今回本遺跡で前期の土器棺墓が検出されたことの意義は大きい。今後の調査によっては住居跡などの検出も期待され、安満遺跡・郡家川西遺跡とならぶ撲点的集落となる可能性がある。さらに後期の竪穴式住居跡や古墳時代以降の遺構も検出しており、弥生前期～中世にわたる複合遺跡であることが確かめられたのは大きな成果であった。

安満遺跡については、遺跡東部で2件、西部で1件の調査を実施した。北9地区では弥生時代中期の土墳・古墳時代の井戸、中世の井戸および自然流路を、また10地区では弥生時代後期の井戸、奈良時代の建物・井戸を検出した。それぞれ各時期の集落の広がりを知るうえ



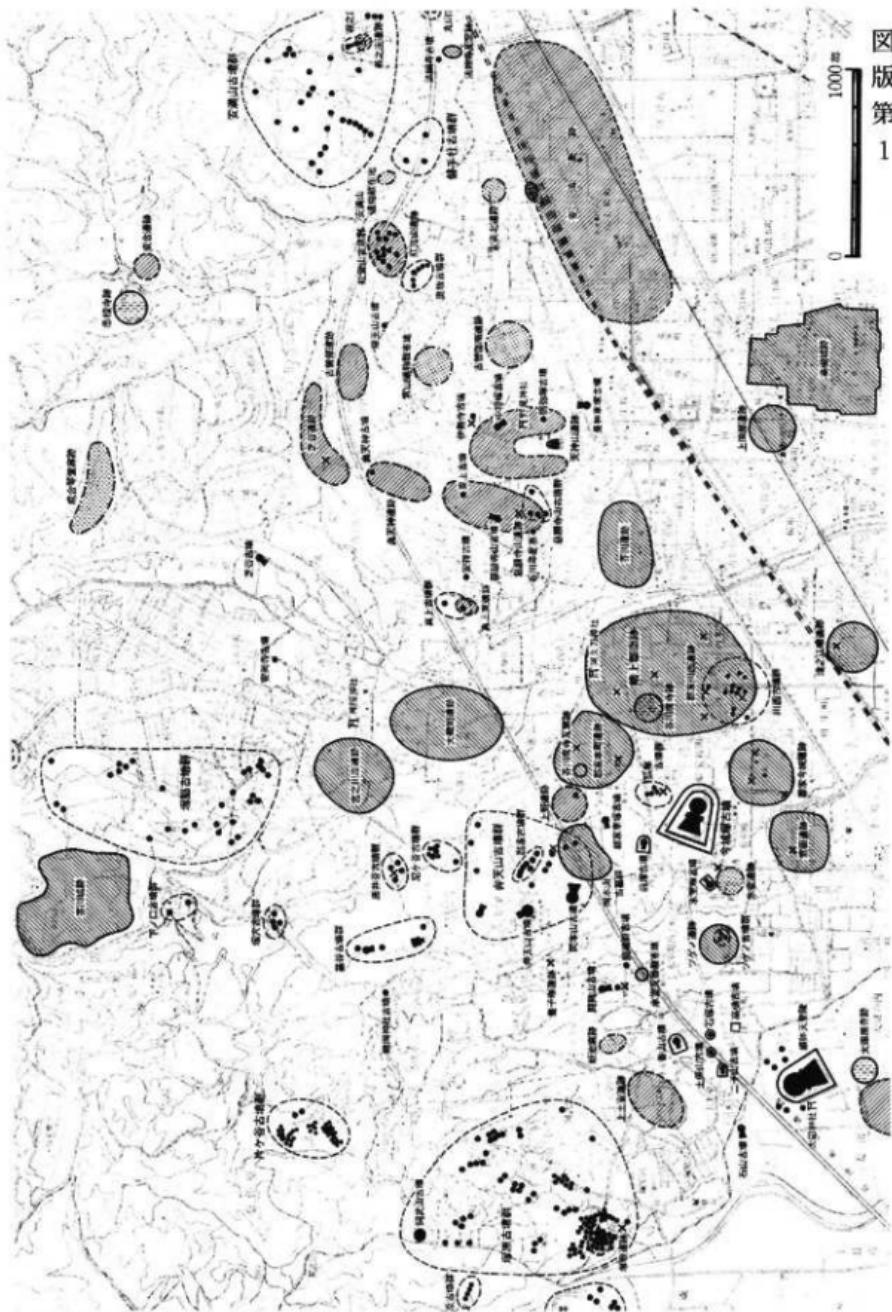
插図第22 輪上郡街 周辺建構図

で好資料となるものである。両地区から製塙土器が出土していることも注意される。一方遺跡西部の22地区では、谷地形を検出したが遺構はみとめられなかった。同様のことは安満遺跡に限らず島上郡衙跡にもいえる。遺構の形成が遺跡内にあっても微地形に左右されることがあらためておもわれ、今後とも、旧微地形の復元・把握に努めていきたいとおもう。

(鏡ヶ江)

図 版

図版第1



嶋上郡衙跡とその周辺



a. 17-F・G・J 地区 調査区北半（西側から）



b. 17-F・G・J 地区 調査区南半（東側から）



a. 17-F・G・J地区 住居跡7（西側から）



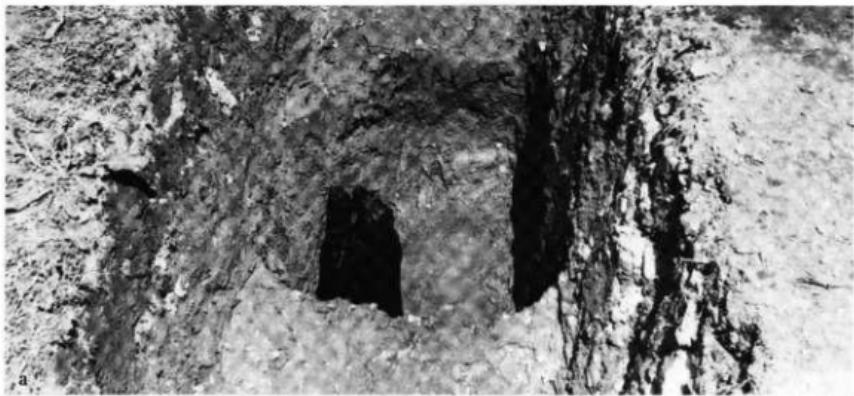
b. 17-F・G・J地区 井戸（南側から）



a. 37-A・E・I・M地区 調査区全景（南側から）



b. 37-A・E・I・M地区 調査区全景（北側から）



a.



c.

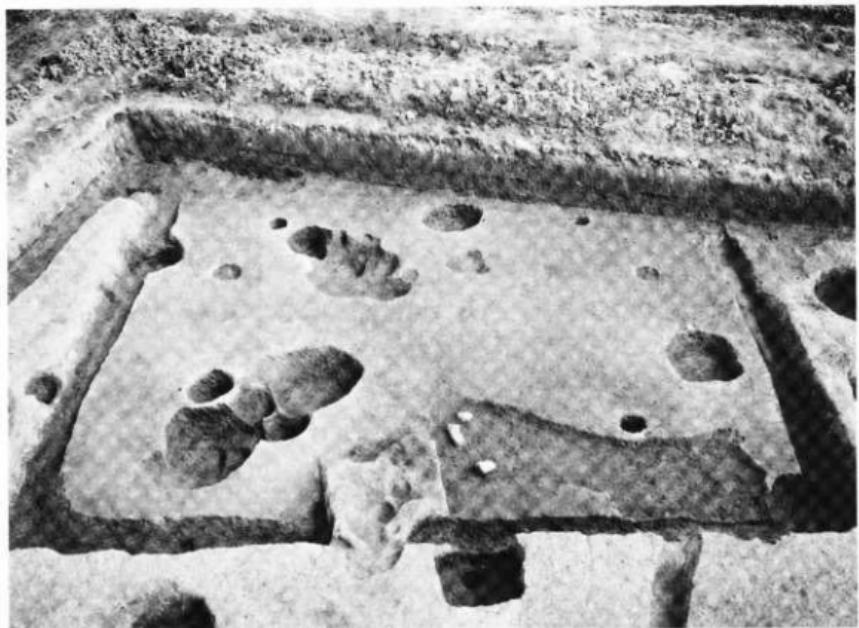
37 - A · E · I · M 地区 a. 柱穴 1 , b. 溝 1 , c. 溝 2



a. 5-M・N地区 東側調査区（西側から）



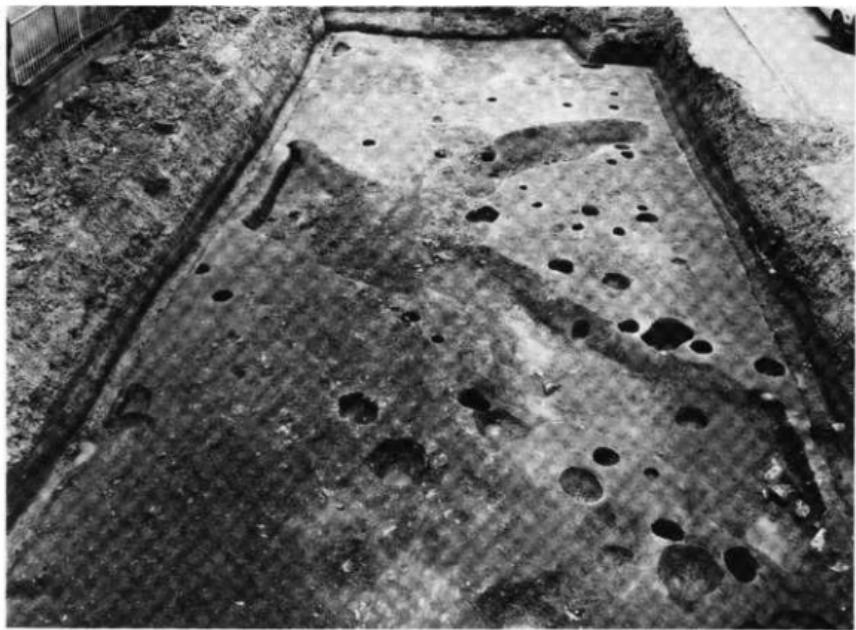
b. 5-M・N地区 西側調査区（東側から）



a. 5-M・N地区 住居跡1（北側から）



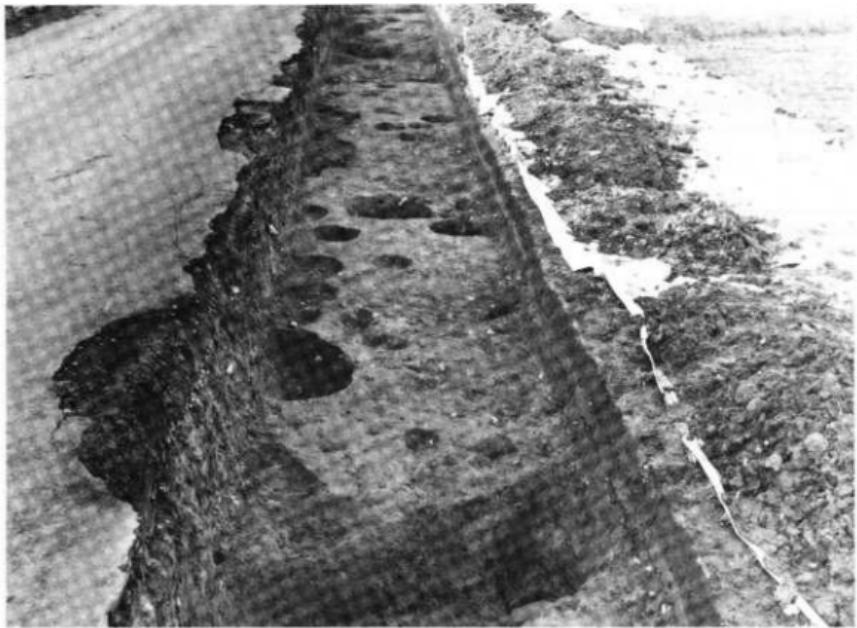
b. 5-M・N地区 住居跡2（南側から）



a. 16-B・F地区 南側調査区（北側から）



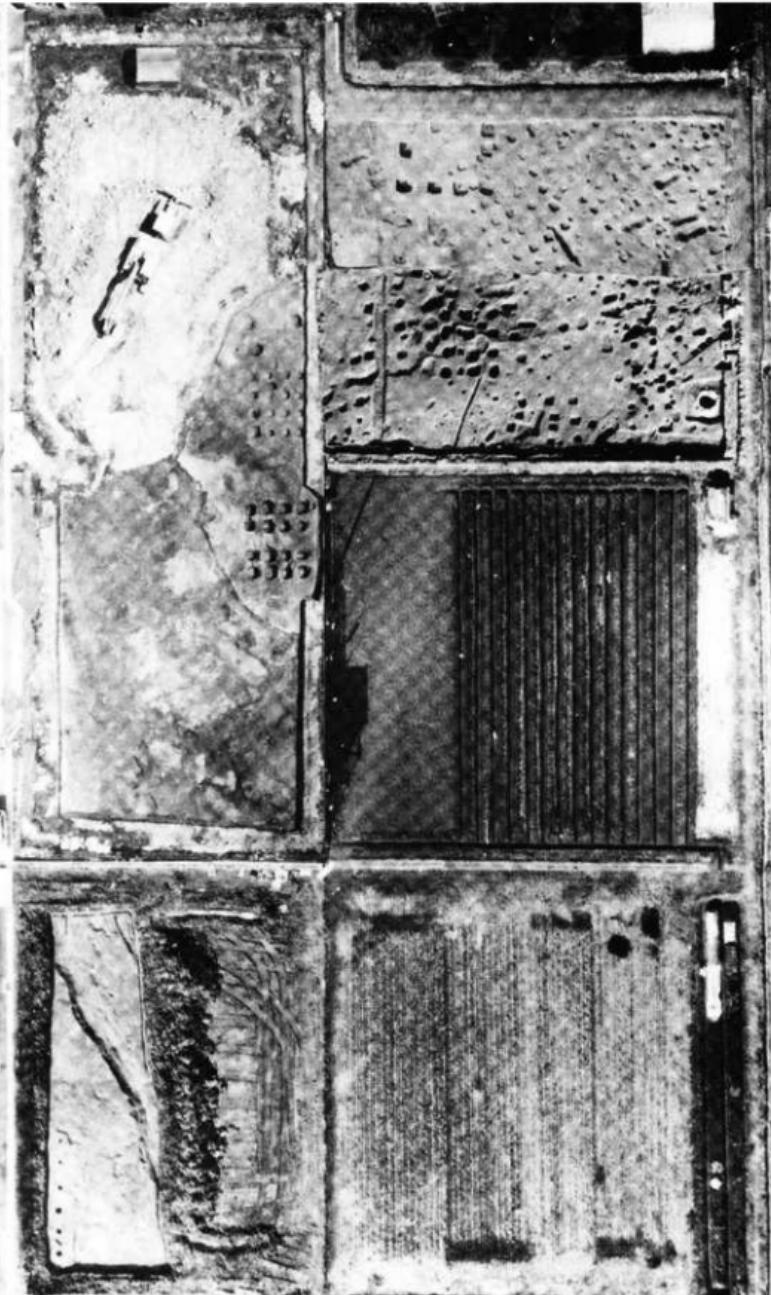
b. 16-B・F地区 北側調査区（南側から）



a. 23-D・H, 33-D・H地区 北側調査区（南側から）



b. 23-D・H, 33-D・H地区 南側調査区（南側から）



44・45 地区 空中写真